
妖と人

ミスターサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖と人

【Nコード】

N6692S

【作者名】

ミスターサー

【あらすじ】

死んだ人間の青年は九歳で病院に入り、早くも六年たった

その青年は死んで閻魔様に第二の人生を貰う事に

「欲」がない青年は転生し、何を見たか

転生先は『ぬらりひよんの孫』の世界

主人公の姿は『刀語』の四季崎の姿

よってらっしゃい、見てらっしゃい、お気に入りは見えてからして
いってくださいまし

ただ今、台本が書きの消す作業の編集中です

死と生

ぬらりひょん、まあ・・・この妖怪をご存知と思われます

ある書物ではイタズラ好きで、人の茶菓子を食っていく妖怪と言われている

はたまた、悪の妖怪の^{ひき}を率いる大将で有名だ

まあ、そんな関係のない会話の中で自分は死にかけています

いわゆる、瀕死状態ですね

そもそも身体が弱くて、六年間も寝たつきりでしたから

「――！」

ああ、口を開いて指示を出す医者の声も聞こえなくなってきた

母と父の声も、姉と弟の声も遠ざかる・・・死ぬんだ、オレ

「父さ・・・ん、か・・・あさん、姉さん達」

「――！！」

「あり、がと・・・う・・・サヨウナラ・・・家族仲良くー」

そしてオレは死んだ

「で、逝ったと思ったら、あの世とこの世の狭間に居るんですかねえ？」

「とりあえず六文払わなくて良いんですか？」

「いや、私に聞かないでくれないかい？」

ちなみに死んだらあの世に逝くには三途の川を渡らなければならぬらしいが、何故か足止めをくらっている

いや・・・ね、あの世って物も気になつて逝つてみたいし、それに美人で巨乳の女番頭が居るから困るんですよ

「・・・はあ」

番頭「ため息は幸運が逃げるよ」

「いや、ため息つきたい気分なんで」

すると後ろから老人が現れた

「？」

「あ、閻魔様」

「よ」

「閻魔様 ああ！？」

老人は閻魔様でじゃあ番頭さんは死神？！

「という訳で、君を転生させまーす」

「なんですとおお！？」

「だって欲がない人間初めて見たし
という訳で転生してね」

「ちょっ！」

「ちなみに否定権ないよ」

「嘘だ!!」

「嘘じゃないよ、ちなみに君が行くのは『ぬらりひよんの孫』の世
界ね」

「NA・ZE・DA！」

「だって面白いじゃん」

「やべえ、初めて殺意という欲が出た」

「その欲は良い欲だな」

「良い欲なんですかね・・・分かりましたよ、諦めました」

「なら願い事を言つて」

「分かりました

まず刀語の四季崎記紀の姿に

二つ目、刀を自由に造れる力を

三つ目、陰陽師の力を使えるように

四つ目、特殊能力は全てを切断する能力を

五つ目、人型の妖怪にしてください

六つ目、動体視力と身体の強化を高めてください」

「六つもかあ、良いな、良いな♪」

そして閻魔様は指を鳴らすと、俺の下の地面が開いた

「寿命は無限だよ、死にたくなったら毒刀『鍍』で刺されるか、刺す事で死ねるよ」

「ギャアアアア!!」

「って頭から落ちて逝ったけど大丈夫かなあ？」

「・・・知りませんよ」

もうヤダあああああ！

刀鍛冶と妖怪

刀鍛冶になり、早三百年・・・

戦国の終わりごろ、俺は刀を造っていた

かの有名な織田信長とさかすき盃を交わした事も有ったなあ、と思い出しながら刀を造るのが日課になっているついこの頃

すると店の戸が開く音がし、店番をさせている微刀『釵』が話をする声を聞く

けど原作の『釵』とは違うのは付喪神になっていると言っていることだし、しかもコイツだけ

ちなみに刀語の完全変体刀12本は全て造った今、腰に差しているのは毒刀『鍔』だ

「四季様、ぬらりひょんと言う男が面会したってます」

すると店先から来た釵

「ぬらりひょん？知らん奴だが通せ、今は鑓を造っている最中だから」

四季とは俺の転生後の名だ

「分かりました」

釵は店に戻り、俺は鑢を造るのに集中し、何故か早く終わった

居間

「俺の百鬼夜行に入れ、刀鍛冶の四季」

「いきなりだな、断る・・・俺は刀を造るしか出来ん男だ」

今、対面している男はぬらりひょん・・・

次々と妖怪とケンカして盃事をしているが腕と人望は確かな奴だ

「帰んな、釵！客人が帰るぞ！」

「待て待て、ワシはお前の刀鍛冶の腕か妖刀の一本が欲しいんじや」

「・・・妖刀と鍛冶を？残念だが俺が製作した妖刀は各地に居る、俺の弟分達が持っている

ぬらりひょん、アンタにやる刀なんて無いぞ」

「なら、腰に差している刀は？」

「アホか、コイツは俺の刀で毒が強い刀だ、他人が持ったら精神異常が起きるぞ」

「ぬうん、欲しいのお・・・主は刀鍛冶じゃろ、造れんのか？」

「・・・造れん、妖刀を打ったらしばらくは打てん
しかし何故、京にいるんだ！」

そう、場は京・・・俺は強者に刀を売るために来たのだ

「魑魅魍魎の主になるためじゃ」

「・・・魑魅魍魎の主ねえ」

「所で、とある公家屋敷に美女が居ると聞いたのだが」

「ん？ああ、瑛姫だな・・・一度だけ見に行った事がある
いやあ、人間じゃなかったら嫁にしたいぐらいだ」

そして釵が入ってきて、お茶を置いて、それを飲む

「そうか、そうか・・・実はその瑛姫に惚れた」

「ブッ！」

俺は口に含んだお茶を吹いた

「驚く事かのお」

「ゲボ、ゲボ・・・驚くわ！普通に驚くわ！」

「なんじゃ、組の者達と同じ反応するんじゃの、四季は」

「当たり前だ！俺は元人間だしな！」

「ほう・・・とりあえず、そんな感じだ」

「・・・もう良い、花開院の当主なみの気楽さだ」

「秀元ひでもとと知り合いか？」

「最近来て、『妖だけ斬れる刀を造ってー』て言うから妖力なしの刀を渡した

力を込めたのは陰陽師だから・・・あの刀に名付けるなら・・・

聖妖刀『祢々切丸』」

「聖妖刀『祢々切丸』か・・・面白い刀だ、ワシに合う刀かもな」

「かもな、アイツは暴れん坊だ・・・お前を選ぶかもしれん」

「選ぶ？」

「刀って奴は持ち主を選ぶんだよ、特に俺の妖刀とかはな
釵、酒を持ってこい！盃は二つだ！」

「はい」

「・・・二つ？」

「ああ、盃を交わしてやる・・・五分五分のな」

「義兄弟か・・・良いぜ」

そして俺とぬらりひょんは盃を交わし、義兄弟となった

刀鍛冶と妖怪（後書き）

もし良かったら、オリジナルの変体刀を感想に書いてください

よろしくお願いします

封印された刀鍛冶（前書き）

この話は秀元が出てきます

秀元の言葉が上手く出来てないと思いますがよろしくお願いします

封印された刀鍛冶

「じゃあ、封印を手伝ってくれんかい？」

「はあ？」

俺の目の前に居るのは『陰陽師』の花開院 秀元が居た

「歳のせいかな、俺・・・ボケたのか？」

「ボケてないよー、よっくん」

「よっくん言うな、四季って呼べ・・・で、封印しに行く理由は」

「そうだねえ、羽衣狐^{はしろうもぎつね}って知っとるやろ」

「知ってるとも大阪城で死んだ、と聞いたのだから、
ってそれと関係有るのか？」

「うん、そうなんよ」

「じゃあ土蜘蛛って知っとる？」

「・・・ちよい待ち、まさか」

「せや、土蜘蛛君、いわゆるツツチー封印を手伝って」

「殺す気かあああ！」

夜

「つてな訳で」

「・・・」

「いや、説明しろ」

「いゃん、いけず」

「なあ土蜘蛛、コイツ、斬り殺していい？ 斬り殺していいよな！」

「知るか・・・つか、騒がしいぞデメエら」

閑話休題

「―と、いう訳で君を封印したいの」

「・・・ああ、そういや確かに羽衣狐も戦う奴も居ねえし・・・
良いぜ、封印して」

「ホンマか？」

「ただし、条件がある」

「条件？」

「簡単さ、コイツ（四季）と戦わせろ」

「えーよ」

「ちょっと待てえええ！俺、死んじゃうから！」

「けど『祢々切丸』で死ななかつたやろ」

「けどもクソもねえよ！」

「えーから逝きや、生け贄」

「デメエ！やっぱり生け贄役かよー！！」

「さあて殺るか」

「！！！」

土蜘蛛はいきなり、正拳突きをしてきて俺は回避する

「避けるなんてやるじゃねえか」

「ちよつ、待った！俺は刀鍛冶なんだ、戦闘向きじゃー」

「楽しもうぜえええ！」

「話聞けやああ！クソ蜘蛛！！」

「いやぁ満足満足、オレを三回斬り殺すとは、やるなテメエ」

「俺は五回死んだぞ、つかテメエは本当に不死じゃない妖怪なのか！？

普通なら肩から袈裟懸け斬り、腕を斬り落したり、首を斬ったのに何で死なねえんだよ！」

首は真ん中まで斬ったけど

「鍛えてるからか？」

「よし、もういっぺん斬らせろ！！」

「仲良くなった所でそろそろ封印させて欲しいやけど」

「おお、悪いな・・・ちよちよいと殺ってくれや」

「分かった」

「・・・なあ、ちょっと待ってくれないか秀元、コイツと盃をして
良いか？」

「えー、はよ寝たいんやで？」

「・・・頼む、一杯だけ」

「良いな、待っているから速くしろよ」

「・・・はよしてや」

そして俺は土蜘蛛と盃を交わし、また戦う事を約束し
土蜘蛛は封印された

「土蜘蛛に刀を造ってやるか」

「え、どんな？」

「秘密」

「なんや、それ・・・」

「・・・で、なんで花開院家に妖怪が居るんだ！」

「あ、お邪魔してます・・・これ、つまらない物ですが」

俺は南蛮菓子の一つ、カステラを出した

「あ、これまたご丁寧に・・・って違うだろ！
貴様、何者だ！」

「イライラしていたら禿げるで、兄さん
あ、コレは『祢々切丸』の本体を造った妖怪、刀鍛冶の四季」

「コレって物扱いだよ」

「禿げてないわ！」

「で、禿げてる坊さんは是光兄さんこれみつや」

「だから剃髪ていはつだ！！禿げていない！」

「つか兄貴の扱い酷くないか、秀元？お前よりまともに見えるぞ、
剃髪だから」

是光と紹介された僧は、俺の手を掴み、ウンウンと頷きながら泣いていた

ちなみに、このあと是光の文書には「四季は良い奴かも」と書いてあったのは知るよしもなかった

「Z Z Z ・ ・ ・」

「・ ・ ・ Z Z Z」

「・ ・ ・ っ たく、寝やがった

しかし『祢々切丸』の奴は大切に使われてるかな？」

俺は立ち上がり、部屋の戸を開けて月を見た

その月は綺麗で、真ん丸で、輝いている月だった

俺は部屋に『鍍』を置き、再び月に見とれていた

「しかし良い月だ、酒に合うな」

コトン

俺は音がした方に顔を向けると『鍍』を持った若い陰陽師が俺を斬った

「ぐっ あああ！」

「やった、殺ったぞ！」

「痛・・・テメエええ！毒刀『鍍』の限定奥義、もっくとつよ猛毒刀与」

すると『鍍』から毒が出て、陰陽師に毒に侵された痣が現れた
ちなみに俺は毒刀『鍍』を普通に毒を与える刀として使っている

「い、い いただああ！」

「・・・苦痛を受けながら死ね」

「だ、だずげで！」

「ふざけるな、殺す覚悟は有るが殺される覚悟もない奴に斬られた
コツチの身はなれ」

ちっ、血が止まらねえ・・・『鍍』は唯一、俺を殺せる刀だからな

「おい、秀元」

俺は秀元を蹴り起こした

「いったあ！なんやね・・・ん？」

斬られた痕を見せると秀元はキョトンとした顔になった

「どうしたの？」

「んなことは、どうでも良い・・・封印しろ、俺を」

「な、なんでや？普通に再生すれ」

「バアーカ、結構深く斬られてるんだよ

しかも元々は毒刀『鍍』は俺の自害用の刀なんだよ」

「なんやて!？」

「頼む、秀元・・・」

「・・・わかった、けど釵ちゃんはどうするんや」

「ぬらりひよんの元に送る・・・釵には伝えてくれ」

「分かった、サヨナラや」

「ああ、サヨナラだ」

そして俺は封印された

「ーて」

誰だ？気持ちよく寝てるのに・・・

「起きてーな」

「ん？なんだ、餓鬼」

「つか、花開院家に餓鬼なんて居たか？」

「餓鬼じゃないもん！！花開院　ゆらだ」

「花開院・・・！？」

「花開院だとおー！？」

「あ、動かん方が！」

「は？」

「ちなみに俺が復活したのは太い木の枝の上だったらしく、まあ言わずとも分かるように」

「落ちるんだよなあああ！！」

ズドン！

「大丈夫か？」

「ああ・・・痛いけどな、餓鬼^{がき}んちよ」

「餓鬼じゃない！」

これが現代で初めて会った秀元の子孫の一人、『花開院 ゆら』との出会いだった

「まあ、いいか」

「よくな〜い!」

ちなみに『鍍』の鞘には・・・

「めんどーだから後は子孫に頼って 十三代目当主、花開院秀元」と彫られていた

あの・・・怠け者の餓鬼陰陽師があああ!

封印された刀鍛冶（後書き）

オリジナル変体刀を募集しています

どしどし感想に書いてください！

よろしくお願いします

「うち、TKG好きなんや」「ゴメン、TKGって何？」

拝啓、あの世に居る・・・花開院 秀元へ

お前の二十七代目は真面目だよ、そう伝えよう
もう、おじいさんだけど

ちなみに今は居間で二十七代目当主と向かい合っている

秀元「二十七代目当主、花開院 秀元だ」

そして頭を下げる

四季「刀鍛冶の四季、十三代目当主に封印してもらった妖怪だ」

そして俺も頭を下げ、挨拶をする

秀元「さて、四季殿には悪いが早速、この京から出ていってもらいたい」

四季「・・・まあ、当たり前だな

陰陽師のお膝元である京に俺みたいな妖怪が居たら京妖怪に力が行
っちゃうからな」

秀元「うむ、じゃが、せっかくだから聖刀せいとうを一本作ってもらいたい」

四季「聖刀？ああ、元になる刀なら打つが」

秀元「うむ、ありがたいTKGを奢ろう」

四季「TKGって何？」

秀元「『たまごかけご飯』だ」

四季「安すぎだ！つか俺の刀ってTKG並みの値段！？」

十三代目は結構、良い値で買い取られたんだが！？」

TKGってカッコいい略だな！！」

秀元「では頼む」

四季「おい、真面目にTKGで買うのか！！」

そして秀元は立ち上がり、工房はアッチに有るからみたいな事を言い始め、居間から去っていった

四季「おい！おおおい！！」

そして俺は秀元が去ったのを見届けて、ため息をつき工房に向かった

四季「ほう・・・」

俺が着いた時、とある子供が刀を造っていた

いや、槍を造っていた

四季「まがましい毒だな・・・」

子供は俺に気付いて槍の先を造るのに使用していたハンマーを投げ
てきたが俺は軽くいなして避ける

四季「危ないなあ」

「貴方は何者ですか？」

四季「あ、うーん・・・通りすがりの刀鍛冶って所だ
名前は四季、種族は妖怪で
十三代目当主、花開院秀元とは腐れ縁の知り合いだよ」

「十三代目と・・・腐れ縁？」

四季「坊主、お前の名は」

「秋房、あきふさ花開院分家『やそりゅう八十流』の次男です」

四季「そうか、秋房か・・・実りがいがある子だな、しばらく工房
を借りるが良いか？」

秋房「は、はい」

そして俺は一番よい鉄を熱して、叩き始める

カン、カン・・・

カン、カン・・・

秋房「・・・あの、四季さん」

四季「ん、なんだ？」

カン、カン・・・

秋房「あの、何故・・・花開院に居るんですか？
消されても仕方がない状況なんですが」

カン・・・カン・・・

四季「十三代目の花開院の恩返しかな」

秋房「お、恩返し？」

カン・・・

四季「ああ、命を助けてくれたのに対しての恩返し」

俺は再び熱して、また叩く

四季「・・・に、しても秋房、お前の槍は本当に槍か？
俺が言えた事では無いが」

秋房「え、まあ・・・」

四季「訳ありなら話さなくていい、けどな・・・その槍は使っ
ない」

秋房「・・・妖槍『騎億』を使うな？」

四季「死期を早く迎えたくなければな」

そして鉄を強く叩き、妖力を送る

四季「出来たぞ・・・僧刀『阿弥陀』」

秀元「『阿弥陀』か、名を換えても良いか？」

四季「コイツが・・・『阿弥陀』が気に入ったらな」

『阿弥陀』からキーンと金属が響く音が鳴った

『阿弥陀』の外見はただの脇差しの短刀だが、鞘には経典の文字が
書かれている

四季「主眼は『裁き』・・・だ、ちなみにコイツは正しい心を持っ
た人間にしか使えない刀だ」

秀元「うむ、なら法刀『閻魔』でどうだろうか」

四季「『閻魔』か」

再び見るとキーン、と鋭く鳴る

四季「気に入ったそうだ」

秀元「そうか、そうか」

四季「さて代金を頂きたい」

秀元「うむ、TKGじゃろ」

四季「おい、真面目にTKGで済ますのか・・・？」

秀元「当たり前じゃろ、なめるなるなよTKGを」

四季「どんだけ好きなんだよ！！」

秀元「たまごかけご飯なめるな！」

ギャー！ギャー！

ゆら「秋房兄ちゃん」

秋房「なんだい、ゆら」

ゆら「あれ、本当に妖怪とお爺ちゃんか？」

なんか友達みたいな感覚やし、子供みたいや」

秋房「ゆら、君は本当に四歳児かい？」

ちなみにこの頃は奴良組は二代目が生存してます

秀元「わかった、つまり現代の文化に慣れるまで住まわせてくれと」

四季「ああ、適応力は有るから一週間で良い
カラクリやら技術も見てみたいしな」

秀元「なら、もう一本」

四季「打てんよ、今はただの人間だ」

秀元「・・・へ？」

四季「妖力を出してみるか？」

秀元「ああ、頼む」

そして妖力を出したが

秀元「むう、確かにあまり無いの」

四季「打つには念を入れて打つからな、俺は妖刀を打つと妖力が空に近くなる、だから打てんのよ」

秀元「なるほど・・・の」

四季「・・・さてと、案内して頂きたい」

秀元「入り口に、ゆらと秋房が居るから書物庫と街を案内して貰え」

四季「ご協力、感謝する」

秀元「帰り道、卵を買ってきてくれ
お金は渡すから」

四季「・・・なんで？」

秀元「たまごか「もうTKGは良いから！」」

ちなみに今回オチは・・・

その後、一般人に紛れ混んで京をパトロールしていた陰陽師達と『リアル鬼ごっこ』になったと言っておこう

あの、二十七代目えええ

秀元「あ、伝えるの忘れておった」

ゆら「？」

花開院、居候・・・1日目『刀鍛冶と天才児の会話』（前書き）

花開院家に居候している四季と秋房の話です

しばらくは花開院家の話です、原作にはまだ遠いです

花開院、居候・・・1日目『刀鍛冶と天才児の会話』

秋房「あの、四季師匠」

師匠「なんだ？」

刀を打った次の日、今はパソコンを弄っていた

ちなみにパソコンは転生前から扱えるのだが、こちらの世界の情報が無かった為に使用している

ちなみに師匠と言い出した秋房は、俺の妖刀・・・つまり変体刀に惚れたらしく、師匠と呼び始めた

そして移動する度に後ろについてくる、まるでアヒルになったみたいだ

秋房「貴方が打った妖刀はいくつ有りますか？」

四季「ん、んー・・・刀は、五百・・・かな？」

秋房「え、意外に少ないですね」

四季「量と質の関係さ、妖力を込めるのには時間もかかるしな」

秋房「なるほど・・・四季師匠は造った刀で自信作は有りますか？」

四季「自信作？まあ・・・有るな

どんな重い物にも耐えられる『頑丈さ』を主眼にした、絶刀『鉋』

どんな物を両断する『切れ味』を主眼にした、斬刀『鈍』

千本の刀で一本の『多さ』を主眼にした、千刀『ツルギ』

脆く、壊れやすい『薄さ』と『軽さ』を主眼にした、薄刀『針』

どんな攻撃も耐えられる『防御力』を主眼にした、賊刀『鎧』

怪力しか持てぬ、『重さ』を主眼にした、双刀『鎚』

死者を蘇らす程の『活性力』を主眼した、悪刀『鏹』

美しく、人を殺す『人間らしさ』を主眼にした、微刀『釵』

王のような冷静な精神で『毒気のなさ』を主眼にした、王刀『鋸』

天秤のように平等に測る『誠実さ』を主眼にした、誠刀『銚』

猛毒が強い『毒気の強さ』を主眼にした、毒刀『鍔』

『精密性』と『連射性』と『速射性』の三つ主眼を持った、炎刀『銃』だ

そして聖妖刀『祢々切丸』、そつちじゃ退魔刀『祢々切丸』って呼ばれてるけどな

代表作はこんな感じだ、『鍔』は俺が持ってるのがそうだ」

秋房「なるほど、あれ？残りの刀は？」

四季「ぬらりひよんの元に『釵』を

三河、現在の愛知県に『鋸』の所有者が居る

越後、つまり新潟には『鈍』の所有者がいる

あとは秘密だ」

秋房「内緒……ですか？」

四季「ああ、そうだ……代表作の変体刀は当時、一国を買える値で売れるからな」

秋房「い、一国を！？」

四季「ああ、特に『鈍』は千人斬り出来る刀らしく……
あ、製作者が言うのも変だけど……まさか本当にアイツが殺るとは」

秋房「千人つて！？無双じゃないですか！！
しかも人口は大丈夫だったんですか！？」

四季「けど当時は数もあやふやだったからなあ、けど五百人斬りはしたんじゃないか？あっはっは」

秋房「……師匠、笑えません」

四季「クツクツ、そうだなあ……」

秋房「ハア・・・」

四季「別の意味でもさ」

秋房「え、別の？」

四季「俺の欲はな・・・」

『丈夫で』、『斬れて』、人や主を『多く』守れる『防御力』も欲しい

『毒のない』と『毒のある』人間の命を『重さ』と『脆さ』を関係なく『人間らしく』救い、『活性』させる・・・

それが俺の欲、『精密』だろ？」

秋房はポカンと口を開け、俺を見る

四季「どうした？」

秋房「あ、いえ・・・なんか、『祢々切丸』を抜いた代表作の主眼が入ってるような？」

四季「さあ、な」

そして・・・この後の会話は無くなり、1日が終了した

なんか最近、欲張りになってきたな俺

花開院、居候・・・1日目『刀鍛冶と天才児の会話』（後書き）

オリジナル変体刀募集中です

よろしく願いいたします、いつもページが少なくて申し訳ありません

文才・・・欲しいです

花開院家、居候・・・二日目『二十七代目と過去話』

夜、少し冷える温度と綺麗な月がちょうど良く交わり、光が俺を照らし、涼しい風を運ぶ

一言で言えば、京に合う風流である

ちなみに今は縁側で座って団子を食っている

「隣、いいかの？」

すると秀元、ちなみに二十七代目の方がやって来た

四季「ん、なんだ二十七代目の秀元か」

秀元「『なんだ』とは酷い、酒を飲まないか？」

デカイ瓢箪ひょうたんを目の前に差し出してくる

四季「酒か、良いな」

そしてお猪口ちゆこを二つ出した秀元は俺の横に座り、酒を注ぐそそ

四季「しかし、現代も面倒だな・・・空気は汚いし、自然は少ないし」

秀元「そう言うな、ほれ注いだぞ」

四季「ああ、ありがとう」

俺は注がれたお猪口の酒を飲んだ

四季「ん？いい味だ、そして木の香りがいい
スゴく高い酒なんだろうな？」

秀元「ふむ、当たりだ」

四季「やっぱりねえ、秀元の分けてくれた酒の近い香りだ」

秀元「ん、いつ酒を分けたのかな？」

四季「ああ、お前さんじゃない方の秀元だよ
十三代目の秀元の方さ」

秀元「十三代目の方が、一体・・・どんな方だったのだ？」

四季「んー・・・どんな奴だっけ
そうだなあ・・・なら初めて会った時の話だ」

四百年前、『祢々切丸』製作依頼の日

秀元「妖怪だけしか斬れない刀を造って」

四季「はあ？」

秀元「だから造って」

四季「おいおい、陰陽師のお兄さん……うちはマトモな刀鍛冶ですよー

んな妖刀の刀は造れませんって」

秀元「えーやん、ってか何時^{いつ}陰陽師と名乗ったかいなあ？
妖刀造りの名人、刀鍛冶の四季さん」

四季「何故、俺の二つ名を……あんた、いつたい」

秀元「花開院 秀元や」

現在

四季「こんな感じかな？」

秀元「面白い出会いだな」

四季「ああ、あの日は久しぶりに店に居たら出会い頭に言った言葉は『妖怪だけ斬れる刀を造って』だぞ、全く・・・子供かと思っ
た」

秀元「子供か・・・」

四季「だがキレる奴だったし・・・目利きが良いんだよ

失敗作を渡すと投げて返すわ、鞘や柄が京みたいじゃないし、汚いから駄目やら言われてな」

秀元「クレーマー？と言う奴かのう」

四季「そんな感じだな・・・まあ俺の方が悪いんだが」

そして沈黙・・・

四季「あのさ、」

沈黙が五分経ち、最初に口を開いたのは俺だった

四季「なんで俺を封印しないんだ？
今はただの死なない不老不死の人間だぞ？」

そう、俺はいつの間にか不老不死になっていた・・・

俺がこの世界に来てから百年ぐらい経った時・・・

夢の中でビニール傘を持ち、傘をさしている閻魔様が

閻魔「久しぶりだな、イーノック」

四季「閻魔様、俺はイーノックではありません・・・今は刀鍛冶の四季です」

閻魔「おっと・・・最近、こういう話し方をする天使の一人が来だな、ついつい真似してしまった
すまない、フッフフ」

四季「謝る気は完全にゼロですね」

閻魔「失礼な0・1は有る」

四季「けど1には満たないんですねー！」

閻魔「さて、君は寿命が無制限と言っただろ？」

四季「ええ、聞いてます」

閻魔『そこで君を不老にしました』

四季『不老！？』

閻魔『うん、そんだけ』

四季『いや、いや、いや！？そんだけで夢に出ないでくださいよ！』

閻魔『無理、あ・・・そういえば、一つ聞きたいんだけど』

四季『なんですか、一つだけです』

閻魔『そんな装備で大丈夫か？』

四季『ハア・・・大丈夫だ、問題ない』

現在

と、まあ・・・こんな感じだ

秀元「ふむ、封印か・・・だが何処に、そんな理由が有るんだ？」

四季「は？」

秀元「ワシは・・・今、酒を飲んでいる相手はただの人間、四季じゃないか」

四季「・・・っ！ハ・・・ハハハ！
なるほど、人間『四季』か・・・ハハハ！」

秀元「？」

四季「少なくとも、生き残る為に
生き物を残酷に斬った妖怪に『人間』って、アハハハ！」

秀元「だったら化け物殺した我々だってそうじゃろ」

四季「アハハハ・・・ハア・・・」

秀元「？」

四季「気に入った！！」

二十七代目当主、花開院 秀元！あんたが気に入ったよ！
少なくとも人間扱いしてくれるのはアンタぐらいしか居ないしな
困った時があつたら俺を呼べ、飛んで行くからよ」

秀元「ほう、心強いな」

すると急いでこの場に来た、若い陰陽師が頭を下げて、こつこつ

「こ報告します、妖怪二匹が侵入しました」

秀元「何い！？」

「二人は妖刀を持っています！一人は

『鈍』で斬られなくなったら下がれと』言い

もう一人は『拙者と『針』の剣技に惚れてもらうでござる』と意味不明な事を！」

四季「・・・アイツらか」

俺は「よっこらせ」と言い、立つと秀元も立ち上がり若い陰陽師の後に続いた

花開院家、居候・・・二日目『二十七代目と過去話』（後書き）

はい、お久しぶりです・・・

ミスターサーです、通称『サー』と呼んでください

あとがきと言っても 何もありませんが・・・

あの謎の妖刀使い・・・もとい変体刀使いの台詞は・・・分かりま
すよね？

一人はオリジナルの台詞で、もう一人はちょっとアレンジしたので
すが・・・

では『サー』でした

花開院家、居候・・・二日目『鈍と針』

えー、皆さん御無沙汰しております

四季でございます・・・まず、ここまで来る経緯はお分かりだと思いますが、来た場所、つまり正門なんですが・・・

「薄さまあ ああ！」

「斬の兄貴！！後ろ後ろ！」

なんぞ、これ・・・

二名は知り合いだが、その後ろにはワラワラと妖怪がいる

何度でも言おう・・・

四季「なんぞ！これええええ！」

そして着流しを着た男（顔は完全に刀語の『銀閣』）が俺に気づいて笑顔で俺に

「久しぶりだ、四季！」と言ってきた

四季「斬か・・・」

一人の男は斬刀『鈍』の所有者・・・妖怪『夜刀神』俺は『斬』と読んでいる

夜刀神はそもそも神だ、が伝承では本来の姿を見ると一族もろとも

滅ぶと伝えられている

ちなみに今は人間だが本来の姿は蛇体で頭に角を生やした姿だ

斬「おーい、薄」

「ん？」ともう一人の青年・・・まあ、完全に錆 白兵の顔と姿をした変体刀の一本・・・薄刀『針』の所有者、鬼神『夜叉』
俺は『薄』と呼んでいる

ちなみに薄は『天夜叉』だ、天夜叉は空を駆ける・・・つまり飛行が出来る夜叉である

薄「久しぶりでござる、四季殿」

四季「うん、久しぶり・・・とりあえず刀をしまってください？」

斬「なんでだ？」

四季「アホか！！」

薄「とはいえ・・・襲ってくる陰陽師達を何とかしてほしいでござる」

そう、今は突っ立っているのではなく回避しながらの会話だ

ん？なんで、『そんなことが出来るのか？』だって？

戦いなれば出来る

四季「しゃーない、おい斬、薄」

斬「なんだ？」

薄「なんでござるか？まさか惚れたでござるか？」

四季「薄、テメえはアホか！！この場は何とかしとくから帰れ」

斬「そういう訳にはいかない、捕らえられたお前を助けに来たんだからな」

四季「なんだ、その誤報！？」

薄「釵殿から聞いたが」

四季「アイツ、会ったらシバく！」

陰陽師A「滅しろおお！」

「「「「おおおお！！」「」「」

四季「ヤバ、早く帰れ！」

斬「クツ・・・確かに引き所だ・・・、斬鉄組！撤退するぞ！」

薄「白兵組もだ！」

「「「「「応！！」「」「」

さあて・・・部下の退路を切り開きますか

俺は地面を殴り、2メートルの斧を取り出した

四季「国刀・・・『鉞^{えつ}』」

国刀『鉞』、俺が造った変体刀の一本

『鉞』は『国の在り方』を主眼とした刀だ

そして俺は斬と薄を追う陰陽師前に立ち阻む

四季「陰陽師ども、うちの部下どもを見逃してくれないかね？」

そうしてくれたら・・・ケガしなくて済むぜ」

だが陰陽師達は退かず、護符やら式紙やら出してきた

四季「退かない奴は死ぬ覚悟が有るんだね・・・」

じゃあ・・・死ぬがよい」

あれから三十分経ったのだろうか・・・？

俺の目の前には俺に戦いを挑んできた陰陽師が地に寝ていた

外見、たいした傷は無いが実はそれが命取りになる

この『鉞』はたいした事がない傷さえ重傷に変えるのだ

美しい刃であり、斧であり、処刑刀・・・それが国刀『鉞』だ

四季「おい、その陰陽師D」

陰陽師「・・・は、はい」

四季「救急車、呼んでおけ」

俺は『鉞』を肩で担ぐと、復活した時に寝ていた木の枝で夜を明かした

が、俺は知らない・・・いつの間にか俺の組が出来ていたという事に

「今、行くぜええ！四季いい！」

島根——とある山

「久しぶりにあのボウヤと飲めるのか、楽しみだね」

花開院家、居候・・・二日目『鈍と針』（後書き）

反省会

えー、はい・・・宇練銀閣と錆白兵が登場しました

銀閣カッコいいですよね！

変体刀の使い手の中でも一番好きなキャラです！

二番は慚愧です！

さて、話が狂うので後書きの続きを

次回に出る変体刀の所有者はこのキーワードです

・海賊

・巫女

です！さあ、誰でしょう？お分かりの方は感想でご記入を

最後にオリジナル変体刀、国刀『鉞』のアイデアを戴いた『夜桜
癒月』さんに感謝いたします

変体刀はまだまだ募集中です、読者の皆様・・・ヨロシクお願いします

花開院に居候・・・三日月『反省、そして—』

秀元「・・・なんか言うことはあるかの」

四季「んー、安西先生・・・TKGが食いたいです」

秀元「滅」

四季「アギヤアアア!？」

今は取り調べされている、周りには花開院の分家の皆さんやら本家やら沢山居ます

で、俺は先程ふざけた発言により『滅』の言葉を戴きました

いや、それは回避はしたからね・・・あれ当たると痛いんだよ

秀元「もう一度聞く、なんか言うことは？」

四季「すみません、うちの部下どもが早とちりして花開院家に殴り込みしました」

秀元「・・・ならば仕方がないが、この二人と戦ってみろ」

すると二人の男の子が出てきた

一人は秋房、もう一人は秋房より背が低い奴だ

四季「秋房は分かるがこのチビはなんだ？」

「チビ言つな！こんのジジイ」

四季「ジ・・・ジジイ!？」

秀元「これ！竜りゅう二!」

四季「いい度胸が有るな、ま・・・ちやちやと殺るか」

結果

四季「鍛えが足りないよ、若者」

竜二「ゼイゼイ・・・ぐ・・・ぐぞが」

秋房「師匠・・・強い」

四季「アッハハハ！伊達に三百年は生きてないさ」

すると一人の・・・つか眼鏡をかけたヒョロちよいオッサンがやって来た

四季「あれ？アンタは、さっきの取り調べに同行していた奴だよな？」

「オレの名は花開院 灰吾^{はこい}だ」

四季「ふーん、教頭と呼ばせてもらって良い？」

教頭「いや、まあ・・・いいが」

四季「で、俺になんか用？」

教頭「ああ、アンタに会いたい奴が二人来ている」

四季「二人い？」

すると背後から竜二が立ち上がり、護符の攻撃をしてきた

竜二「隙あり！」

四季「会話に挟むなバカもん！」

俺はジャンプして竜二の後ろに回り込むと人差し指を立てて

四季「秘伝体術奥義！千年殺しいい！」

ブスッ！

竜二「ギャアア！？」

秋房「あ、飛んだ」

教頭「しかも、かなり飛んだし、池に落ちたぞ」

四季「アイツが悪い」

客室

四季「待たせて失礼した」

「ほんと、遅い」

「待ちくたびれたぜ」

四季「なんだ、お前らか千^{せん}、そして賊^{ぞく}」

俺が部屋に入ったら二人の男女がいた

女は完全に敦賀 迷彩だ、妖怪名は『柳女』だ

『柳女』は柳に女の霊が宿る自縛霊の一種だ、ちなみに『千』がその場から離られる理由はその柳の一部を御守り袋に入れ、首にぶら下げているからだ

ちなみに千は千刀『ツルギ』の所有者だ

鎧を着た男（ちなみに兜は外している）は顔が仮面で見えないが声

は完全に校倉 必である

コイツは妖怪『海坊主』・・・説明しなくても良いかな？

賊刀『鎧』の所有者である、なので『賊』と呼んでいる

四季「千も賊も何年ぶりだ？」

千「さあねえ・・・」

賊「んな、事はどうでも良いだろ・・・まず連絡だ、『鉋』の所有者は死んだ

『鉋』は持ってきたから今、渡す」

そして木箱を渡され中身を確認すると『鉋』が有った

四季「・・・そうか、涙 磊落は死んだか」

賊「次だ、『鏢』の所有者は見つかってない」

四季「当たり前だ、あれは非人道的な刀だしな」

賊「三つ目、アンタが寝てる間に組が出来た」

四季「ふーん・・・はい？」

賊「いや組が出来たんだよ、アンタの『装組』が……」

四季「本当かよ！？は、ハハハ……知らぬ間になんとやら……かで、組はいくつに別れてるんだ？」

千「こつからは私が言おう、まず九つに別れてるんだ

先代『鉋』所有者……涙は『大柱』組

現『鈍』の所有者……斬は『斬鉄』組

現『ツルギ』の所有者……この私、千が『鶴』組

現『針』の所有者……薄が『白兵』組

を指揮っている、が……涙が死んだ今『大柱』は四季のボウヤが指揮するんだよ」

四季「なら別の所有者を見つけるしかないな」

賊「続いて俺から説明する

俺が指揮つてるのは『鎧』組、防御力が売りよ！

次は現『鎚』の所有者……双が指揮する『大手』組

釵が率いる『つくも』組

現『鋸』の所有者・・・王が『疑^ぎ』組

現『銃』の所有者・・・炎が『狙撃』組だ」

四季「うーん、なんとなく分かった気がするが・・・お前らと行くとするか、東京に」

千「お、本当かい？」

四季「ああ、タイミングは良いし・・・、それに花開院家の一部は——来たな」

千「ちつ、どうやって抜け出す」

すると兜を着けた賊は

賊「突破するぞ、俺が切り開く・・・千は直ぐに逃げろ
後方は四季、お前に任せた」

千「分かった」

四季「あれ、『ツルギ』は？」

千「部下達が持つてるから無刀さ、何・・・体術だつてある」

四季「だが念のために『鉋』を渡しておく」

俺は背中に担いでいた『鉋』を賊に託し、『鉋』を千に持たせた
そして俺達が立ち上がった瞬間・・・
突然、襖が開き、護符が飛んできた

これが生死の大脱走劇の始まりの合図だった・・・

花開院に居候・・・三日目『反省、そして―』（後書き）

灰吾よ、何故出てきた・・・出すつもりはなかったのに何故出てきた・・・

スゴく・・・後悔しています・・・

+ 千年殺しを打ったのも、ゴメンなさい竜二好きの皆様・・・（ノド、）

さて、賊刀『鎧』と千刀『ツルギ』が出ましたね

『ツルギ』は漢字では出ないのでカタカナで記入しました

難しいなあ、『ツルギ』の漢字・・・

では次回にお会いしましょう・・・

ちなみに俺の考えている変体刀『十二本』の強さ順

一位、『鎧』

二位、『鏖』

三位、『釵』

四位、『銃』

五位、『鈍』
六位、『銓』
七位、『鎚』
八位、『鉋』
九位、『ツルギ』
十位、『鍔』
十一位、『鋸』
十二位、『針』
と考えています

逃走経路は・・・

賊「オラオラオラ！どけええ！」

四季「おい、手加減しろよ」

つか、『鎧』の限定奥義・・・刀賊『鷗』を連発してスタミナが心配だ

賊「ヒヤッハアア！」

陰陽師「隙有り！」

千「・・・はい、背負い投げ」

陰陽師「プギヤア！？」

四季「あれ？俺・・・語り手しか出来ない程の空気？」

千「そうね」

四季「・・・泣きたいです」

正門

秀元「・・・」

賊「どけええジジイ！限定奥義いい！賊刀『鷗』！」

四季「おい！バカ！」

竜二「『きょうげん仰言、こんじょうすい金生水の陣』！」

四季「賊！止まれ！」

賊「は？」

すると、ちょうどよく竜二の水の方陣に捕まった

賊「くそー！」

四季「あのバガ者！」

千「今、助けるよ！」

「させるか！式神『弁慶の薙刀』！」

我の名は花開院 豪羅！参る！」

「いくのだ！！『ゴモラ丸』！花開院 破戸、行くよー！」

ちつ、邪魔だな・・・

退場してもらいたい所だが多勢に無勢・・・、俺達が無勢だ

「肯定せず・・・久しぶりに会おうと思っていたら、この有り様か・・・」

すると背後から乾いた音になり、豪羅の足から血が出た

豪羅「グオオオ!!」

俺は後ろに向くと・・・

四季「炎か、久しぶりだな」

「否定せず、久しぶりですな・・・主」

不忍と書かれた仮面を着けた男が立っていた、つか外見と声は完全に左右田 右衛門左衛門だ

みんな（変体刀十二本の所有者達）から炎と呼んでいる

ちなみに炎の正体は『龍』である、だが龍の一族に永遠に許されない罪をしてしまい、人間の姿をしている

現、炎刀『銃』の所有者である

炎「それで賊はいつまで持ちそうなのですかな？」

ん？あ・・・溺れてる、賊が溺れてる・・・聖水で溺れてる

『鎧』は硬い分は重い、しかも海の妖怪と言えども聖水に浸かれば

力が抜け、泳げなくなり溺れる・・・

四季「大体、五分か・・・？」

炎「ならば、ちょうど良く持って来た、あれを使って頂きたい得物が」

炎は腰に差していた刀を二本を渡した

四季「おい、これって」

炎「は、・・・赤刀『焰』でございます」

赤刀『焰』・・・主眼は『凄まじい灼熱をその身に宿す』・・・だ

四季「ハハ、準備良いね・・・その準備万端さは否定しない」

炎「有りがたき、幸せ・・・」

四季「んじゃ、賊！！大人しくしてろよ！
おとな

赤刀『焰』・・・限定奥義・・・」

破戸「させないよ！！ゴモラ丸！」

千「そうさせないよ、僕ちゃん！『鉋』限定奥義！『報腹絶刀』！」

すると千は『ゴモラ丸』と呼ばれた式神の突きを『鉋』でガードし、高く跳んで袈裟懸け斬りをし、胴を切断、再び跳ぶと『ゴモラ丸』の目に『鉋』を突き刺す

『グアアアア!』

破戸「『ゴモラ丸』!?なんで『ゴモラ丸』の突きをくらって折れないんだよ!その刀!!」

千「フフ、陰陽師の坊や・・・これは妖刀と呼ばれる『鉋』だからさ」

四季「千・・・撤退準備しておけ・・・
よし、溜め終了・・・」

『焰』・・・限定奥義『りょうげんえんは燎原炎波』発動!

居合い斬りの要領で二刀を引き抜き、炎の斬撃を飛ばし、賊を閉じ込めていた聖水を蒸発させる

本来のこの奥義は、斬撃を飛ばした方向は全てを焼き尽くす熱量が出るのだが、今回は賊を救出するための量を出しただけだ

ちなみに、この変体刀・・・『焰』は全てを焼き尽くすイメージが沸くような赤色一色にしている

鞘も鐔も―全て赤い

それだけではない、刀身は『火の全てを纏える』太さがある

これが赤刀『焰』と呼ぶ由縁だ・・・

っと、説明してる暇はないな・・・

四季「賊！限定奥義『鷗』で正門をぶち壊せ！」

賊「オオオオ！賊刀『鎧』！限定奥義、刀賊『鷗』！」

そして全身から煙が出て、賊はうなだれて次の一瞬

ズドン！！

花開院家「・・・へ？」

千「久しぶりに本気を見たけど・・・速いねえ・・・」

四季「良いじゃねえか！！アイツの畏は『波』だからな」

炎「捉えきれず・・・見きれぬ速さ、見事」

四季「さ、さつさと行くか・・・呆気に捕^とられてる花開院家が戻らない内に」

「あ・・・四季、何処に行くんかいな？」

すると後ろから声がし後ろを見ると、ゆらが居た

四季「ああ、お出かけた・・・」

「まあ、永遠にだが」と俺は付け加えた

ゆら「・・・また会える？」

四季「さあ・・・けど何処かでまた会うかもな・・・」

その時は敵かもしれんよ」

千「四季のボウヤ！速く！」

四季「ああ、わかった！・・・またな」

ゆら「うん、またね」

そして花開院家を後にした・・・

四季「と格好かっこうをつけて出たのは良いんだが・・・なんで賊ぞくが地面に埋もれてるんだ？」

炎「正門を破った時、勢いが余り、頭から落ちたそうで」

四季「掘り出すか」

千「そうだね」

賊「・・・すまん」

決まってればカッコいいのになあ・・・本当

逃走経路は・・・（後書き）

はい、最新話を更新しました

なんかスミマセン・・・賊刀『鎧』が好きな方、校倉が好きな方に謝罪をさせていただきます。

いや、『鎧』は『防御力』に対しての意味はチートですからね・・・

この作品では水中は。ですが・・・

空中や熱にはアウトですね・・・それさえ克服出来れば・・・

今日この頃、刀語のアニメを見てまして『まにわに』を出すか出さないかを考え・・・

キャラクターの味がちゃんと原作通りに出来てるかが心配です

迷彩は・・・姉御キャラ

校倉は兄貴キャラ

と考えています

最後にオリジナル変体刀、赤刀『焰』のアイデアを戴いた『ふかやん』さんに感謝します

装組、集結

関東にある店「たちばな」

四季「さて、俺を初め・・・『釵』、『鉋』を抜いた変体刀を持つた人物が揃ったな・・・
まあ、大柱組は副組長が来たな」

薄「そうでござるな」

斬「ああ・・・」

千「そうだね」

賊「おう」

炎「はい」

「ウチ！お団子おかわり！」

「僕はお茶」

「・・・餡蜜あんみつを」

「ふむ、我はお汁粉を」

四季「お前ら・・・本当にマイペースだよな」

台詞の前に名がないのは、まだ登場をしていない順を説明したい

まず「お団子をおかわり」を言ったのは変体刀十二本の所有者、双刀『鎚』の双だ

彼女、つまり外見は凍空いっそうこなゆき、である

彼女は妖怪の『鬼』である

「僕はお茶」と言ったのは誠刀『銓』の所有者、誠だ

彼女は女仙人だ

ちなみに外見は、原作『刀語』の七花達と出会った時の彼我木輪廻ひがきりんねの姿である

次に「餡蜜を」と言ったのは王刀『鋸』の所有者、王・・・

彼女は『鴉天狗』である、ちなみに外見は汽口慚愧きぐちざんきである

最後に紹介するのは『大柱』組の副組長、鳳凰・・・

久しぶりに驚いたのは真庭と姓が付いていた事

さらに鳳凰は名の通り聖獣『鳳凰』だった・・・

ちなみに鳳凰に絶刀『鉋』を譲ろうと思っている

名を改名し、絶と名付けた

四季「……えー、大柱組は鳳凰……つまり絶で良いよな？」

絶以外「意義なし」

四季「次に釵を回収、奴良組……だっけ？ぬらりひよんの組は……
・浮世絵町に有るらしい、そうだよな、絶」

絶「うむ、間違いない……情報を間違える事が三つもない私の仲間が聞き入れた情報だ、確信だろう」

四季「てな訳で、奴良組に行くか」

王「すみませーん、餡蜜お代わり」

王以外「おまえ、何杯食うんだよ！十杯目だぞ！？」

王「えへ」

四季「……もー、いいや」

ハア……胃が痛い

奴良組、門前

四季「さて、どうする？」

炎「不解^{わからず}、解りませんな
なんなら・・・ぶち破りますか？」

賊「俺の出番か！」

双「いいや、ウチです！」

賊「俺！」

双「ウチ！」

賊「俺！」

双「ウチ！」

賊「お「うるせええ！」・・・」

たく、うるせえなあ・・・

四季「斬、頼んだ」

斬「零閃・・・五機」

そして零閃で門を細切れに切り崩すと装組の十一人は奴良組の敷地に入る

誠「ねえねえ！ここは四季に来たことを教えない！」

四季「え、うーん・・・良いけど」

俺は息を吸い、こう言った

四季「ちわー！！三河屋です！！」

四季以外「サザエさんか！！」

そんな発言をした瞬間、十人が俺に目掛けてライダーキックを炸裂した

四季「ちよっ！キックはやめて！ギャアアア！」

無論、俺は回避出来ずに全員の蹴りをくらい、吹き飛び・・・地面にひれ伏し、顔だけを上げた

四季「フッフ・・・更に出来るようになったな、ガンダム」

双と四季以外「誰がガンダムだああ！！」

双「ガンダム？」

炎「双は・・・知らなくて良いことだ」

四季「イテテ、たく首に逝ったぞ、誰の蹴りだ？」

俺は立ち上がろう腕に力を入れると背中に頭が長い老人がいて、二ヤリと俺を見て笑った

まさに何処かのマンガで出てくる・・・ぬらりひょんだ

「久しぶりだのお、四季」

四季「・・・まさか、ぬらりひょん？」

「ああ、ぬらりひょんじゃ」

俺はぬらりひょんを退けて、立ち上がると、ぬらりひょんを見下ろす

四季「老けたし、縮んだな・・・ぬらりひょん」

ぬらり「ふん、部下に足で蹴られた貴様に言われたくないわ」

四季「なんだとお？」

ぬらり「殺るか・・・？」

四季「・・・いや止めておこう、利点もないしな」

ぬらり「そうか・・・そう聞いて安心した、ところでどうやって来たのじゃ？」

四季「ん」

俺は指を空に指してた

ぬらり「飛んできたのか？」

四季「違う、俺の刀で来たのさ、今は見えないが俺の組員が全員乗ってるのさ」

ぬらり「それは、もう・・・刀ではないと思うのだが？」

四季「けど、ちゃんと斬れるぞ？艦刀『錘』は」

艦刀『おもり錘』、この刀は『大きさ』が主眼だ

艦がついているから軍艦一隻の大きさはある

実は過去に錬金術をしていたら出来た品物で、千刀『ツルギ』ぐらいの数は軽くある

一つ一つに能力があり、今は航空とステルス迷彩がある『錘』で来たのだ

ちなみに乗ってきた『錘』は戦艦『大和』の大きさはある

ちなみに大和は全長263mある

それと小舟型『錘』もある

千ある内、小型が980隻、残りが大型だ

ちなみに『錘』全部は水深可能だ

四季「しかし頭が長いなあ・・・おい、物が乗つけられるんじゃねえーの？」

ぬらり「五月蠅いのお・・・」

場はぬらりひよんの部屋、俺はぬらりひよんと対面して話している

他の変体刀所有者達は炎を覗いて客間で待機している

その炎は天井裏で待機している

四季「んじゃ、本題・・・『祢々切丸』の点検と『釵』を回収しに来た」

ぬらり「ふうむ、『釵』を返すのは無理じゃ」

四季「ああ？なんでだ」

ぬらり「簡単じゃ、今は孫の教育「孫おお!？」うむ、孫の教育係

をさせておる」

四季「孫って・・・え？お前、結婚してたの？」

ぬらり「そうじゃ、何を驚いて」

四季「普通に驚くわあああ！てか瑛姫と結婚したのか！？」

ぬらり「ハハハハ、ザマアみる」

四季「殺すぞ！！老いばれジジイ！」

炎（仲が良いな、少しばかり四季殿が押されているが）

閑話休題

四季「なら『祢々切丸』！あれは！」

ぬらり「ワシの息子、鯉伴りはんが持つてる」

四季「・・・もう良いや、なんか諦めた」

すると襖が開き、小さい子供とぬらりひょんが若い頃にそっくりな奴が出てきた

まあ若い頃のぬらりひょんと違うのは髪が黒い所だ、たぶん母親譲りなんだろうな

「じいちゃん」

ぬらり「おお、リクオか」

そしてリクオと呼ばれた子供はぬらりひょんにダイブした

「やれやれ」

そして若い男は俺の横に立ってそう言った

四季「ん？あんたは？」

「ああ、俺は奴良鯉伴だ」

四季「ぬらりひょんの息子か」

鯉伴「ああ」

そして俺は鯉伴の腰に『祢々切丸』が差して有るのに気が付いた

四季「・・・うむ、『祢々切丸』はお前を主と認めてるな・・・いやあ良かった良かった」

鯉伴「？」

四季「こっちのことだ、気にしないでいい」

それと自己紹介させていただく、装組・・・組長、刀鍛冶の四季だ」

鯉伴「任侠者か」
にんぎょもん

四季「ああ、そう感じて構わないよ」

炎「楽しい所、申し訳ありません・・・」

四季殿、釵が変体刀の面々と会い、今こちらに向かっています、殺
気立てで」

鯉伴「天井から・・・忍か？」

四季「ああ・・・炎、お前の情報をひ、否定する！」

炎「それは、無理かと・・・」

四季「ちくしょう！ついに炎にも否定されたか！」

そして縁側の障子が開き、釵が涙を流しながら

釵「攻撃対象者を認識」

四季「ちょ！待って！」

釵「人形殺法『突風』」

四季「あぶねえええ！！」

釵の口から刀が飛び出し、俺はギリギリ避け、頬から血が少しだけ
流れた

そしてスルスルと口の中に戻り、ぶあつと涙を流し始めた

釵「グズユ、じんばいじだんですよ（心配したんですよ）！」

四季「すまない、本当にすまない！」

釵「勝手に封印されて！」

四季「すいません！すいません！」

リクオ「釵ちゃんに尻に引かれてる」

鯉伴「リクオ、どっから覚えた！その言葉！」

リクオ「青田坊から！」

鯉伴「青の野郎！」

ぬらり「天井裏にいる奴・・・大変だの」

炎「いえ、慣れました」

外野は俺を救わないで傍観し、俺は釵に土下座をしていた

四季「釵、足がそろそろ」

釵「正座」

四季「はい・・・」

終わったのは夕食の準備の時間までだった

装組、集結（後書き）

この頃、人は刀語を見ていると『人は刀だ』と思ってしまふサーです
理由は簡単、身体は刃で中身が鞘と感じがするからです

身体は刃をだが、鞘・・・つまり心が刃を抑えると考えてしまってます

虚刀流は初代と七花を抜く、虚刀流は鞘を殺したから刀として生きて行けたのかと思います

が、七花は道中で心と言う鞘を手に入れたから悔やみ、涙、笑顔が出来るようになったのでは、ないでしょうか？

そして七実も・・・それを忘れなければ生きていけたのかもかもしれません

変な後書きを書いて申し訳ありません

深く考えると自分はそう感じてしまいます

ここまでの後書きを見ていただいた読者の皆様に感謝をします

そしてお気に入り数が百を越えるという嬉しい事実も感謝感激の言葉で一杯です

では長くなると苦情が来そうなのでこの辺で・・・

最後にオリジナル変体刀、艦刀『錘』の考案者『mist』さんに
感謝します（礼）

家？ふ．．．愚問だな！ぬらりひょん！

朝はキライだ

二日酔いに来るからキライだ

二日酔い．．．そう、ぬらりひょんの家で宴会をし、全員酔いつぶれて．．．その先以降は覚えてない、現状は俺の右腕を枕にしている干

左腕には王が枕に、頭を枕にしてる双．．．

右足を俺の腹に乗っけている斬．．．

四季「．．．重い」

それが朝起きて、初めに発^{はっ}したの言葉だった

ぬらり「で、住む家は決まったか？」

朝食．．．を食い終わり、毒刀を素振りしていた時、隣の朝食を食ったぬらりひょんが現れて言った

四季「．．．」

まあ、まず．．．ぬらりひょんを殴った．．．拳骨^{げんこつ}で

四季「すみません、すみません、すみません」

隣の住人「あら、若いのに代わりに謝るなんて、いい若者ね」

四季「昨日のあの家にお世話になった四季崎 竜太郎りゅうたろうです、これはお近づき品ですが」

隣の住人「あら、美味しそうなお饅頭！いただくわ！」

ちなみに謝ったら許してくれました

ぬらり「で、竜太郎」

四季「・・・なんだよフランクフルト頭野郎」

チャキ！

ぬらりひょんはドスを構えた

四季はどうする？

- ・逃げる↑ピッ
- ・某ファーストフードのピエロの真似しながら回避
- ・毒刀で殺す

四季「逃げる！」

ぬらり「！？待てコリアア！」

四季「待つて死ぬバカなんて居ねえよブアアアカ！」

ぬらり「kill! you！」

薄「元気でござるな」

四季「薄！見てないで助けろや！」

薄「無理でござる」

四季「oh! NO おお！」

ズバ！

ギアアアアア！

四季「・・・で、住む家だっけ？」

ぬらり「いや、斬られたのに傷口が再生の早くないか！？一応、誤

って斬ったから」

四季「大丈夫だ、問題ない・・・」

ぬらり「そ・・・そうか」

四季「ちなみに家の件は『鎧』組が住む家の元を取りに行ったから」

ぬらり「???」

リクオ「四季さーん、ちょっと来てー」

四季「ん？おう！行くぜ！」

そしてリクオに呼ばれ、廊下に出たら石鹼が有り、滑った

四季「痛いんだけどなあ、頭から打ったし」

リクオ「・・・足が」

鯉伴「何故、俺まで正座を」

四季「うるせえ、子の責任は親の責任だ」

ちなみに言うておくが二時間は正座をさせている

するとドタドタと足音を立てて来た賊

賊「おーい、アレを取りに……なんだこりゃ？」

四季「反省会、で……アレは？」

賊「ほれ」

賊は真っ黒な四角い箱を投げて、俺はキャッチし立ち上がる

四季「あ、正座はもう良いから」

そして俺は立ち上がり、ぬらりひよんを呼んで中庭に出る

ぬらり「なんじゃ、呼び出しおって」

四季「おいおい、面白い物を見せてやるのに」

すると鯉伴とリクオが出てきた瞬間、先程の真っ黒の四角い箱を上
に投げた

四季「壊れてなければ良いんだけど……
住刀『家』、限定奥義『住刀変化』」

すると四角い箱は一つ的小屋になった
ちよつと小さいが刀語の鑢一家の家が出来た

「「「（；。ド）「「」

あ、啞然としてる

すると突撃隊長の青田坊がやってきて、目を開いてこう言った

「なんじゃこりゃあああ！！！」

ぬらり「つまり、先程の箱は家になる妖刀なのか」

四季「ん、まあ簡潔に言えばな、ちなみに妖刀じゃないから変体刀だから」

鯉伴「はー、しかし良くできてるな」

四季「主眼は『カラクリ』と『住居』だ
ちなみにこの変体刀は城にもなるよ」

リクオ「本当！！！」

四季「城にするのはやらんぞ、リクオ・・・
ちなみに下手に入るなよ、こいつは俺の認めた奴以外入ると」

ガラ、パカッ

青田坊「ん？」

ああーアアアア！

四季「あんな風に無断に入ったら玄関の落とし穴に落ちたり、刀で斬られます」

「「怖!?!」」

絶「四季殿、何をしてるのだ」

四季「絶か、まあ、点検をな

それはそうと絶に頼み事が有るんだが
落ちた巨体の妖怪を引き上げて」

絶「無理だ」

四季「あ、やっぱりwww」

俺は腰に差してあった変体刀の一本、収刀うけいり『箱』から2つの変体刀を出した

まずはウォーハンマーの形状をした変体刀、豪刀ごうとう『震』

二本目は懐刀かいとう『槍』、一握りの柄とナイフぐらいの刀身だ

『震』の主眼は『地震の力を宿す』

『槍』の主眼は『（暗器のように）忍ばせること』と『伸縮性』だ

まず、『槍』で玄関の天井に刺して、落とし穴の方に伸ばす

そしてしばらくし、青田坊が柄に掴まって出てきた

青田坊「ひでー目に遭った・・・」

四季「勝手に入るからだ」

リクオ「入るからだー」

青田坊「若ああ」

鯉伴「まあ、それは置いて・・・この変体刀か？震度はどれくらい耐えられるんだ？」

四季「ん、確か・・・マグニチュード六〜八までは耐えられる」

試してみる？と四人に聞くと全員頷き、俺は『震』の限定奥義『めい鳴動烈震』どうれっしんをする

この限定奥義は『震』を持ちながら回転し、打撃を与える技で一撃でも入ると並大抵な防御でも無効させてしまう威力だ

ちなみに『鎧』には効かなかったので悪あしからず

その奥義を『家』に打ち込んだ！

「」「」「何してんだああ！？」」「」

四季「よし、壊れてないな・・・」

青田坊「そういう問題ツスカ！？」

このあと、装組の幹部達から色々なお怒りの言葉を戴きました

全員の声を聞きました

「ふむ、我は住刀の屋根で寝ていたら、いきなり限定奥義を噛^かまされ落ちた、首からな・・・
主の首をもらい受けるぞ？」

「人が眠ってるってのに、変な事をしゃがって・・・赤ん坊以来だぞ、慌てて起きたのは」

「四季のボウヤ、せつかくの酒・・・零^{じろ}れたじゃないか、しかも衝撃でビンが割れたよ？」

「惚れない衝撃でござる・・・死ねばいいでござる」

「うちの『鎧』組員が全員怪我したんだが？」

「ウチが寝ていた時、飾っていた『鎚』が落ちて刺さって死にかけたんですが・・・顔の横ですよ顔の横っ！」

「四季様、人形殺法を食らいます？」

「鴉天狗君と将棋で名勝負だったんだけどなあ」

「なぶりますよ、『鋸』で」

「不^{かばい}庇^{きれず}、一度痛い目に遭えば良いのです」

しかも多勢に無勢、庇いきれせんな」

全員、怒りのマークを浮かべて俺に反省文を書かされました

ちなみに住刀『家』を何個か作り、空き地に刀語の舞台となった建物建てました・・・城は無いからな！あと奇策師の家も！

釵「ほら、あと二枚」

四季「オニイイイ！」

建てたのは俺と釵以外の人達でしたが

家？ふ．．．愚問だな！ぬらりひょん！（後書き）

さて、後書きのネタ．．．もとい話すのがキツくなりました

最後にオリジナル変体刀のアイデアをくれた

住刀『家』の考案者『夜桜 癒月』さん

懐刀『槍』の考案者『mist』さん

豪刀『震』の考案者『ふかやん』さん
に感謝します

次回から原作に進みます、うん．．．進めたら良いな．．．

鯉伴、暗殺される！？

・・・四月になった、春の代名詞の花である桜が散っている

俺は『たちばな』で団子を食べている、鯉伴とリクオと一緒にだ

四季「・・・美味いだろ、ここの団子」

鯉伴「ん、確かにな」

リクオ「おいしい」

四季「ところで高い奴を食ってるけど・・・金、持ってきたの？」

奴良親子「・・・」

四季「おい、目を見てなんか言えよ・・・おいコラ」

すると鯉伴とリクオが消えた

四季「あ、あの親子おおお！！」

俺は席を立ち、店から出ようとすると店員と見えるメガネを掛けた男性に肩を掴まれ、請求書を出された

四季「」

俺は声が出ないほどの金額だった

四季「すっからかんだよ、すっからかん」

季節は春だが俺の財布は冬を迎えた

言うな、言うな・・・

泣いてないからな、涙なんて出ていないからな・・・公園でアイスを食べて俺を見てる男の子

「おじさん、大丈夫？お腹痛いの？」

・・・止めて、マジ涙が

閑話休題

とりあえず俺は開き直る事にした
開き直るのは、やっぱり良いことだね・・・
政治家が開き直るのはダメだけど

四季「で鯉伴、どうしたんだ・・・その娘は？」

場は神社、時は夜、桜が散り綺麗な夜桜が出来ていた

いや桜じゃないな、山吹の花が散っているから夜山吹か？

鯉伴「ああ、ついさつき会った娘だ」

四季「ついさつきって、まあいい・・・」

リクオは離れて、気になる物が有ったのか離れていく
そして少女は山吹に近づき、「キレイ」と言う

四季「綺麗な山吹だな、お！変体刀を思い付いた！」

鯉伴「ふうん、なあ・・・知人の古歌こかが有るんだが聞くか、四季」

四季「古歌？ぜひ聞きたい」

鯉伴「『七重八重花ななえ やえは咲けども山吹の、実のひとつだになきぞ悲し
き』・・・」

四季「『実のひとつだになきぞ悲しき』って、その意味はまさか」

するとリクオが俺達を呼び、そちらを向くと少女が刀で鯉伴を刺していた

四季「?!鯉伴!!」

少女「鯉・・・伴様」

少女の叫び声が辺りに響いた

俺は必死に鯉伴に呼び掛け、草むらから一体の妖怪が現れ、笑っていた

五分たった頃、少女と妖怪が消えてリクオは組員を呼びに行かせ

俺は『箱』から変体刀を取りだした

巨大な手術用のメスの刀、医刀『癒』で鯉伴を斬る

四季「限定奥義『癒快痛快』」

俺はあの世から蘇らす奥義を鯉伴に放った

今夜はどんな夜より、とても長く・・・感じた

鯉伴、暗殺される！？（後書き）

原作入りました

とても考えた回です

鯉伴を生かすか、または逝かすか・・・考えていたのです

最後にオリジナル変体刀、医刀『癒』を考案してくださった『m i s t』さんに感謝します

人生の大半は綱渡りと賭け

朝になり、鯉伴は奇跡的に蘇った

半妖だったから傷は回復に向かうのが速かった

そして今、奴良組本家でぬらりひょんと『奴良組ご意見番』の木魚達磨と話している

ぬらり「まず礼を言わせてくれ、ありがとう四季」

四季「いや俺の責任を全う^{まっとう}しただけ・・・
少女だから油断してしまった、油断してなければ刺される事も無かったろうに」

達磨「悔いてる場合か、今は二代目鯉伴様をどうするかだ」

四季「今は俺の屋敷に鯉伴は寝かしている、護衛は安心しろ今、直轄部隊の大柱組『真庭』が守ってるからな」

装組直轄、大柱組『真庭』

大柱組のメンバーは俺の直轄部隊になっている

最近だが大柱組は十二人の暗殺集団な為か群れを作らなかった
それは前の変体刀『鉋』の所有者がそう決めたらしく、遊撃隊のポジションらしい

組に関しては今はここまでしておく

ぬらり「それは安心だが、気付かれたらアウトじゃ」

四季「・・・封印するか？」

達磨「封印!？」

四季「ああ、あ!いや!そんな深い意味ではないぞ達磨!工作だ工作!」

「「工作?」」

おおう、二人揃って同じ事を言いやがって

四季「ああ表向きは鯉伴死んだ事にするが裏では鯉伴を封印するんだ大体、十年が目安だろ・・・」

ぬらり「・・・世間の目を誤魔化すのか？」

四季「そうだとも、ぬらりひょん・・・」

達磨「じゃが四季殿、それでは味方も騙す必要が」

四季「『敵を欺くには、まず味方から』だろ?鯉伴の奥さん、若菜^{わか菜}さんには無理矢理でも了承させる」

「異論は?」と聞くと他二人は悩み始めた

すると天井裏から物音がし、「四季殿」と声がする

四季「炎、遅いぞ」

「申し訳ございません、情報が次々と入りまして」

四季「その言い訳は否定する……で、その情報を簡潔に」

「は、鯉伴殿暗殺計画を裏で行ったのは京妖怪と情報が」

四季「はあ、京妖怪ねえ……アイツらか」

ぬらり「炎、聞くがやはり怨みか？」

「それもあります、不信、信じられないですが……
羽衣狐が黄泉帰りを果たしました」

四季「たしかに不信だな、炎……悪いがもう少し探りを入れる……」

・
真庭の人鳥ペンギンと蝙蝠「うもり」を連れていっても構わない」

「……承知」

そして天井裏から気配が消えた

四季「それで二人とも、工作の件はどうする？受けるか受けないか」

「……」

二人は無言で頷いた

装組の屋敷、客室

鯉伴「そうか、まあ妥当だとうな判断だな・・・」

四季「ああ、悪いな・・・勝手ながらアンタの了承も得ずに」

鯉伴「いや、いい・・・ところで」

四季「ん？」

鯉伴「あそこで倒立している忍者はなんだ？」

鯉伴は壁に倒立している白い忍び服を着た男を指を指す

四季「真庭 白鷺」

そう、こちらの『真庭』は全員・・・刀語の本人達と姿も背丈も同じなのだ

四季「アイツは結構喋ると頭が痛くなるんだ

白鷺・・・ちよつと逆立ち止めて、長い言葉を言ってくれ」

白鷺「。う貰てせら乗名。鷺白庭真は名の俺。だ鷺白のり喋さ逆。

くしろよ後以」

鯉伴「・・・頭痛くなるな」

四季「封印はコイツの持つ変体刀でやる」

白鷺「・・・『楽神』刀封、刀体変」

封刀『神楽』は使い捨てタイプの刀だ、無論使い捨てな為に封印が十年以内に限られる

鯉伴「・・・十年後だな」

四季「十年後だ、また会おう、『神楽』限定奥義『封印廻舞』」

ふついのまじ

スパン！

そして鯉伴は屋敷の庭に封印され、住刀『家』で祠を作り、鯉伴を封印した刀を入れた

その三日後、葬式（仮）が行われ、沢山の人達の涙を見て胸がチクリと痛んだ

人生の大半は綱渡りと賭け（後書き）

・・・むずかった、やっぱり鯉伴はご退場をさせました

疲れたああ！特に白鷺がああ！

ではサーでした

えっと・・・養子を取りました（by四季

拝啓、読者の皆さん

おはよう、こんにちは、こんばんは・・・

刀鍛冶の四季です

今、俺は幹部達から色々な言葉をかけられています

「人を拐ったのか!？」とか

「ロリコンだったのか!？」とか

「私に近づくな」とか

もう色々と「四季のボウヤ!」聞いてるのかい!」

四季「聞ってるよ、千・・・明日の朝飯の献て『ツルギ』で殺すよ?」いや死なないからって止めてね?

千「議題はアンタが連れてきた白髪と金髪と黒髪の少女の三人だよ!」

薄「あの幼児おさな、リク才殿と同年でござる、何処から拐ったのでござるか?このロリコン」

四季「だから!妖怪の血が四分の一ぐらい有る孤児だからね!

つかロリコンじゃないからね!

説明すつから待ってくれ!だから幹部全員で変体刀を振り上げるのは止めてね!

特に千!お前、なんで泣いてるの!？」

双「女の子を泣かした・・・」

王「サイテーですね」

真庭女性陣「そうだ！！そうだ！！」

四季「俺に味方は居ないのかあああ！！」

閑話休題

四季「あの子達は孤児だよ、俺が引き取ったんだよ」

賊「引き取ったって手続きや書類は？」

四季「二日前に済ませてある」

斬「ならよお、なんで俺達に相談しなかったんだ？」

誠「そーだよ、ご意見番で有る僕にさえ相談なしって」

四季「あの子達は心を閉ざしていてな、特に妹がな」

「あと、昔の俺達みたいだったからな」と付け足すとこれ以降の反論は無かった

真庭忍軍「？」

四季「とりあえず、まあ！みんなに紹介しよう！新しい家族！」

ガラツと襖が開いた、白髪の少女と金髪の少女、黒髪の少女が出てきた

この三人、刀語で出てくる子供時代の三人に似ていた

白髪の少女は無論、『奇策士とがめ』こと容赦姫

金髪の少女は否定姫を子供時代にした感じ、多分・・・大きくなる
と否定姫になるだろう

最後の少女は鑓 七実・・・ご本人にそっくりだ

四季「ほら、挨拶しなさい」

「四季崎 とがめだ」

「四季崎 姫よ、よろしく」

「四季崎 七実です」

上から白髪 of 少女、金髪 of 少女、黒髪 of 少女 of 自己紹介だ

四季「てな訳で、新たな家族が増えたから」

賊「アレ、か？」

王「ただいま準備します」

千「大丈夫だよ、私の部下達が準備してるから」

炎「準備万端とは」

千「私の所は三度の飯よりアレが好きなんだよ」

とがめ「父上、アレって？」

四季「アレって言うのは――」

子供達を抜いた幹部は大声を上げた

幹部一同「お前ら宴会じゃああああ――！」

「ヨッシャアアアア――！」

天井やら床下から、廊下から、縁側の障子をスパンと開けて入った
りする組員妖怪が現れた

四季「今宵は無礼講！皆の衆、飲め！歌え！笑え！」

組員「応!!」

子供達「アレって、宴会なの!？」

四季「うん、まあ・・・楽しめ!」

俺は笑うと宴会用の子供達に食べ物や席を立ったのであった

オマケ、もし四季がぬら孫の世界ではなく別の世界にやって来てしまった場合

四季「・・・」

拝啓、父上と母上・・・

今、転生したばかりなのに変な白い生き物が居ました

「ねえ、僕と契約して魔法少女にならない?」

・・・困ったなあ

つか、男だから魔法少女じゃなく魔法使いだろ

どうなるの、俺・・・?

えっと・・・養子を取りました（by四季（後書き））

はい、後書き・・・

四季「おい、最後のアレなんだよ」

いや、ね・・・ほら最近さ、なんか「僕と契約して魔法少女になつてよ」って台詞が多いからね

四季「便乗^{びんじょう}したと」

はい、その通り！

四季「じゃあ何だよ後ろのメンバー、あんたが書いてる多作が後書きに集合してるんだよ」

「どーも、清める鬼と屍の主人公、クロキです」

「東方真庭語の真庭忍軍十二頭領の代表者、真庭 鳳凰だ」

「東方医療神の。。。だ。。。は名前がないため我慢してくれ」

「とある一方通行とバイオテクノロジーの真だ」

四季「で・・・なんで呼んだんだよ、この人達を」

ボコボコにしたいらしいよ、四季を

四季「なんで!？」

真「良いよなあ・・・お気に入り登録数が150越えた人気者があ」
↑登録4件

〇〇「ええ、殴りたいですよ」↑登録2件

クロキ「ほんとだよあ」↑登録8件

鳳凰「そうだ、だから我らが来たのだ、殴るために」↑10件

四季「おかしい！おかしいよおお！！」↑154件

「「「四季、テメエはシネエエ！！」「「「

四季「ギャアアアア！！」

なんか始まった所で後書き終わりです

ちなみに現在『2011年6月4日』のお気に入り登録数で数を書
いています

四季「たすけてくれえええ！！」

時は加速すし、成長も加速する・・・

アレ（四季ロリコン疑惑騒動）から何年か経ち、娘達全員は小学三年になりリクオの幼なじみ関係となっている

無論、親子関係も上手くいっている

最近、俺が行っている甘味屋『たちばな』の男の子は六年生になったとか聞いた

ああ、そうそう・・・実は近所に鑓家が有ってな、もう本人とも断言できる刀語の子供時代の『鑓七花』を発見

ちなみに『六枝』も居た、六枝さんは妻が病死で先に逝かれた為に七花と二人っきりの生活だった

七花と逢ったのは娘達と公園に行った時だった

いや、その時はまさか鑓家の親子が居るとは思ってもよらなかった

で子供達は子供達で友達になり・・・父親同士はパパ友になった

無論、鑓家は拳法家一家として虚刀流という道場を開いていた

あと、とがめが原作通りに七花君に惚れた、そして七花君も・・・認めたくない（泣）

さて、軽い説明は終わり・・・今、奴良組の会議に参加している

「四季殿、主は飲まぬのか」

四季「心配、感謝する・・・が禁酒していな」

「なるほど、これは失礼」

はあ、先程から俺に近寄る妖怪が多い

多分、ぬらりひよんの義兄弟だから俺に媚^こびを売ってくる

はあ、うざい・・・うざいなあ・・・正直にウザい！

すると、ぬらりひよんとリクオが部屋に入ってきて幹部妖怪一同は自分の位置に座る

ぬらり「やあやあご苦労、どうじゃい？みんな最近、妖怪楽しんでるかい？」

四季「んな御託^{ごたく}は要らん
用件だけ言え、用件を」

ぬらり「なんじゃい、四季・・・えらく機嫌が悪いの」

四季「五月蠅^{おとし}い、用件だけをちやつちやと言え」

ぬらり「うむ、そろそろ三代目を決めねばなと思つてな」

ニヤ、とぬらりひよんは笑う

「それは良いですなあ、二代目が死んで数年・・・
いつまでも隠居した初代が代理ではお辛いでしょ」

いち早く反応したのは奴良組の幹部ガゴゼだった

そしてガゴゼの武勇伝を語る妖怪が何人か出て色々言う

「子供の神隠し」とかそんな感じのだ

四季「・・・ふん、子供しかあの世送りしか出来ぬ腰抜けがよく言うぜ」

ガゴゼ「なんじゃと？」

ぬらり「四季、要らぬ事を」

四季「事実だろ、でガゴゼさんに譲るのか？」

ぬらり「いや、三代目はリクオに継がせる」

四季「ほう・・・が、えらく早くないー

おや、ガゴゼさん・・・顔色悪いが？」

ガゴゼ「あ、いや・・・そんな事はないですぞ、四季殿」

四季「・・・そうか」

リクオ「じいちゃ・・・」

ぬらり「どうしたリクオ、喜ばんか
お前が欲しかったもんじゃろ」

リクオ「え」

リクオは目を見開き、汗をかいている

ぬらりひょんが何か言ってるようだが無視

ぬらり「では、採決を取る」否定する、俺は否定だぜ、ぬらりひょん「―四季？」

四季「理由を聞いたそうな顔だな、まず理由その一『リクオの気持ち』」

その二『まだ早い』

の2つだ、とりあえずリクオには考える時間を与えたらどうだ？」

ぬらり「む、じゃが・・・ワシ、このままの生活をしているとストレスで過労死してしまう・・・ごほごほ」

四季「アホか、その過労死について否定しよう、お前・・・この前も無銭飲食して逃げたよな

とりあえずリクオ、ちよつと夜風にあたろうか」

リクオ「・・・うん」

俺は立とうとすると奴良組の幹部『牛鬼』が刀を首に当ててきた

四季「どういう・・・つもりかな？」

牛鬼「・・・総大将に言った暴言は取り消しにしていたきたいたとえ対等な立場だとしても」

四季「暴言？ああ・・・すまなかった

けどな、牛鬼さん・・・そんな刀で俺を斬れるのかな」

俺は畏^{おそれ}を発動させて刀の根元を斬る

まあ説明しなくとも刀の刃は地に落ちる
おうおう、幹部一同は目を開いてるよ

四季「それでは」

俺は立ち上がり、リクオの手を引き、中庭に出た

四季「ふう・・・夜風が良い、風流だな」

リクオ「・・・」

四季「どうした、黙り込んで」

リクオ「四季も妖怪なんだよね・・・」

四季「ああ、けど・・・なんでそんなことを聞くんだ？」

リクオ「・・・」

黙り・・・か・・・しゃーないな・・・

四季「話は変わるがリクオ、俺は元人間だったんだ」

リクオ「え？」

四季「戦国時代は知ってるか？」

リクオ「解らないよ」

四季「クク、そうか・・・まあ、かなり昔に俺は産まれたのさ」

リクオ「関係あるの？組を継ぐのと」

四季「関係ない！！」キツパリ！

ズジャアアアア！

おー、頭から滑ったし、いい音するな

リクオ「無いのに話したの！！？」

しかもツツコミレベルも上がってるし

四季「まあな、けど嫌な気持ち無くなったたる？」

リクオ「あ・・・」

四季「さて、何が遭ったんだ？話してみろ」

俺はリクオが今日、学校で有った事を聞いた

なんでも、学校の友達が「妖怪は悪い奴」とか言ったりしてリクオは反対な意見を出したが皆は信じてくれなかったそうだった

それでリクオは迷っているそうだ・・・

人間に迷惑をかけてしまうか、人間として生きるか

四季「うーん、難しい問題だな・・・」

リクオ「四季は、その時・・・どうするの？」

四季「・・・考える！かな？」

お前には組を引き継ぐには時が有る、考えてみたらどうだ？」

リクオ「うん」

リクオは力なく頷くと自室に戻っていった

四季「ハハ、ありやヤバいかな？さて、絶・・・居るか？」

俺は後ろを向くと絶が片膝を着いて頭を下げている

絶「ここに」

四季「京に行ってる炎の代わりに真庭の半数を影からリクオを護衛してくれ

そして、お前は通学バスの運転手になり、リクオの友達を護衛してくれ」

絶「奴良組の子の友達をか？」

四季「うん、なんかガゴゼが怪しくてな・・・まあ、とりあえずだ」

絶「承知」

フツと絶は音を起てないで消えた

忍者は何で音を起てないで消えるんだろ？

ま、何も起こらなければ良いんだけど・・・

「・・・」

四季「つか考え事してる間に横に立つなよ、ぬらりひょん」

ぬらり「フン、なんじゃい・・・あの忍者は」

四季「ああ、俺の護衛する忍^{しのび}さ、略^{りやく}して護衛^{ごゑい}忍^{にん}」

ぬらり「洒落^{しゃれ}か？」

四季「・・・」

俺は空咳をし、ぬらりひょんはその行動にペカって笑った

四季「んで、どうした？」

ぬらり「牛鬼の刀、直して欲しいんじゃよ」

四季「あー、うん・・・あれノリでやっちゃったからさ、悪い事しちゃったからね」

ぬらり「じゃ、頼むぞ」

四季「あいよ」

そして、ぬらりひょんは幹部達が居る部屋に戻って行った

牛鬼さんに謝罪の品を持って謝ろう・・・
そして刀を直そう・・・
俺はそう思いながら俺も部屋に戻った

後日談・・・ではないが部屋に戻った直後、奴良組幹部達が見ては
イケない者みたいない目で俺を見た

調子に乗りすぎたかな？・・・あれ目から汗が・・・

オマケ劇場、四季と装組幹部、千との出会い

このオマケは千視点で行きます

私が死んで十年経った・・・
時代は戦国の乱戦、私は一人で死んだ・・・理由は武士に売られそ
うになり私は逃げ、首を吊って死んだ

それだけの事、ただ私は山賊の一人をしていて所属していた山賊の
唯一の女山賊だった

が、先程の死因の原因となった武士集団に山賊狩りをされ、全滅・

「そして今は柳に憑いてるのに人に見えない霊・・・か・・・」

私は十年、柳から離れられない・・・けど死んでから唯一の楽しみは時代の流れを見ることだ

昔は柳しかなかった場所も今では人が作った川が目の前にあり、近くには長屋が出来た・・・そんな流れを十年、見てきた

けど、それも今日で終わり・・・理由は私が憑いている柳が明日切り倒されるのだ

「死ぬのは二回目か・・・」

私は柳に寄りかかり、膝を抱えて顔を下げた

気付いた時には雨が降ってきて、私は泣いていた

——死にたくない、死にたくない！

私は本心からそう思いながら雨に打たれていた

すると足音がした、普通の勢いのなのでそれくらい聞き取れる、私は足音の方を向くと傘をさした人物が歩いて来た

私は関係ないと思い、再び顔を下げた

そして足音は私の前まで来て、止まる

え・・・止まった？何で？

色々と考えていたら、私に雨が当たらなくなった

「なあ、その若い女・・・なんで泣いているんだい」

私は顔を上げて見ると傘をさした人物が私に雨を当たらないように傘を出していた

「私のことかい？」

「お前さん以外に誰が居る？今は夜だ、夜道で泣いていたら風邪引くぜ？」

私は霊になって、初めて人に気付いて貰った最後の夜に・・・たった一人の男に

「グズ・・・ヒック」

「おい、どうした！？大丈夫か！？」

「な　ん　でも　な　い」

「夢か・・・ずいぶんと懐かしい夢だね」

私は今、昔の名を捨てて、千と名乗っている

私は中庭に向かい、剣の稽古をしている恩人の男に挨拶をする

「おはよう、四季のボウヤ」

そして挨拶に気が付いた男は私の方に向き、

「ああ、おはよう千」

と言った・・・

時は加速すし、成長も加速する・・・（後書き）

オマケ長い！！（ドヤ

四季「知るかアホウ！」

四季のプロフィール

名前・・・四季

通り名・・・『刀鍛冶の四季』

身長・・・176cm

体重・・・70kg

性別・・・男

畏・・・切断、法力

所持品・・・収刀『箱』、毒刀『鍔』、娘三人と撮った写真、組員と幹部の誕生日が書かれた名簿

←詳細

欲がない人間と閻魔様に言われて、ぬら孫の戦国時代の始めに転生された

奴良組初代ぬらりひよんとの出会いは祢々切丸を帯刀していない時、京で四季が出していた店でぬらりひよんが訪ねて来たのが初めての出会い

畏は閻魔様に転生前に全てを『切断』する力と陰陽師の『法力』を手に入れている

法力は祢々切丸に全て注ぎ込んでいる為に今はない、そのため妖力しかない

ちなみに装組組長だが普段は緩やかな雰囲気だが、やるときはやる義理娘を三人育てていて三人に対しては過保護である、つまり親バ力である

刀鍛冶はキレる奴なのか？（前書き）

ここからは台本書きを止めます

名前「

→これ

刀鍛冶はキレル奴なのか？

会議の次の日、つまり翌日、俺は牛鬼さんの刀を打ち直していた

牛鬼さんは「無名な刀なので打ち直す必要がない」と言ってくれた
その後、よく見たら名刀でしたよ

ああ、顔から血の引く音がリアルに聞こえたね

「つか牛鬼さんは何で昨日、俺に刃を向けたんだ？」

「實力を知りたかったのです、私は貴方が総大将の義兄弟という話を聞いて」

「實力を試したのか・・・ま、いきなり来てさ、奴良組の幹部扱いだし

俺自身がぬらりひよんの命を狙う可能性も有るからね、判断は間違っていないよ」

そして再び刀に視線を送り、涙が出てきた

「しかしどうしよう、名刀を斬っちゃったよ」

「はい？」

「知らなかったのか？腰に差してたのに・・・」

「いや名がない無刀なので」

「・・・この価値知らないの？額でいけば千万は下るぞ」

「!!!!!!」

と今朝には、こんな会話があった

今は刀を直して休憩をしている、外を見るともう空が夕方だった

「・・・夕方の、散る日の光が、染みるかな」

「うーん、五点」

俺は俳句を歌っていると後ろから誠が横から現れた

「厳しいな」

「季語がないし、つまらないよ、そんな句は」

「・・・で何のよう?」

「・・・ガゴザが「ガゴゼな」そうそうガゴゼが君の娘の乗ったバスを襲撃したよ」

「ガゴゼめ、もう動いたか・・・行動が速いな」

「どーするんだい？」

「決まってるだろ、娘達に手を出した奴は・・・」

「・・・やれやれ、急速に組員を集めるとするよ、幹部は？」

「組員も何も要らん、俺一人で十分」

「そつか・・・何か久しぶりに怒ってる？」

「気のせいだ、場所は？」

「浮世絵町の——」

俺は場を聞きいて、車庫に行き、カスタムしたバイクに乗る

「やれやれ・・・本当、世話を妬く娘達だぜ」

絶視点

ふむ、トンネルが崩されたな・・・

四季殿の勘はアタリか・・・

四季殿の娘方と子供たちも無事、なんとかなるか？

「絶」

「ん？これは七実殿、無事だったか」

「ええ、問題ないわ

けど、何故・・・貴方が居るの？」

「四季殿に頼まれてな、主達と奴良組の一人息子のご友人達の護衛だ」

「ふうん」

すると一人の少女が何か気付き、短い驚きの声を上げた

そして我は七実殿に「待機してくれ」と言つとそっちに向かった

「どうしたのだ？」

「え、あ！運転手さん」

・・・成る程な

「人があそこで並んで」

「・・・全員下がれ」

「え？」

「下がれ！！」

すると一人の少年が少女が見つけた人の群れにライトを照らすとガゴゼが居た

「あんまりトンネルが壊れなかったようだな、とにかく全員・・・皆殺しじゃ

若、もろともな」

「ふむ、やはり狙いはそちらか・・・」

そう我は言つと、ガゴゼは我に気付いた

「ん？なんだ貴様・・・」

「装組、幹部・・・絶」

「装組！クツクツク・・・ちょうど良いな、貴様も殺す！！」

すると後ろから瓦礫に穴が空き、百鬼夜行を連れた一人の少年が我の目の前に現れた

なんだ・・・この張りが有る空気は
なんなんのだ、この空気は

「よう、護衛ご苦労」

そして少年の後ろから我が知っている顔、四季殿が笑顔で我を見ていた

四季視点

いやー、驚いた・・・現地で奴良組と遭遇した上に、リクオが妖怪化した姿を見るなんて

「あ？どうした？」

「あ、いや・・・スゴい変わったなあ・・・て」

つか達磨さん、俺達抜きでガゴゼと話さないでよ
理由聞けないじゃん
ま、関係ないし・・・娘達を探すか

「おーい！とがめ、姫、七実！大丈夫か！」

「ぢぢうゝえ」

「おぞいわよ！ー！」

「遅いですよ、お父さん」

上から、とがめ、姫、七実が放った言葉だ

「ごめんなあ、怖かっただろ？」

「なに子供と戯れてるんだよ！」

すると雑魚が俺を後ろから斬りかかって来る、が

「娘の心配しない親がどこにいる、背後から襲うなんて奴は・・・
ド三流だぜ」

ビュン・・・！

「は」

俺は後ろに手を振り、背後に居る雑魚の腕を切り落とす

「！！ギャアアアア！！」

「腕、斬れちまったな」

俺は後ろに振り向くと、俺を畏れる目で見える雑魚が居た

「た、助けて！！」

「否定しよう、その命乞いはな」

俺は足を振り上げて子供達に悪影響にならない程度に雑魚の頭を潰す
潰すと言っても頭の骨を割るぐらいだが

ふう、終わり・・・

あ、リクオが友達を庇ってガゴゼを斬りかかっている

やるねえ・・・

「ヒイイイ！ いたい！ いたい！」

「オレが三代目を継いでやらあ！！ 人にあだなすような奴あ、オレが絶対にゆるさねえ！」

おいおい・・・三代目宣言かよ、速くねーか？

「オレが魑魅魍魎の主となる！！
全ての妖怪は、オレの後ろで百鬼夜行の群れとなれ！」

そしてリクオはガゴゼを一刀両断した・・・

すると達磨さんが俺近づいて来て、話しかけて来た

「四季殿、この達磨・・・知ってながら」

「ん？」

「今気付いた」

「何に？」

「闇世界の主とは、人々に畏敬の念さうも抱かせる
真の畏れをまとう者であると！」

「闇世界の主か・・・大物の知り合いになっちまったな」

ドサッ

「あれ？リクオ？」

「リクオ様？」

達磨さんと話していたら突然、リクオは倒れ、奴良組の組員はリクオに寄っていく

「どうされましたー？」

「いや、急に倒られて・・・」

「まさか、やられていたのか!？」

すると達磨さんがリクオに寄り、見る

「人間に（・・・）・・・戻っている（・・・）?」

それを聞いた一同は達磨さんを見て俺を見る

「・・・妖力も感じないし」

「憶測だが」と俺は付け加える

「四分の一の血を継いでるから、一日の四分の一しか妖怪で居られない・・・かも」

ポクポク・・・チーン

「えー！ー！！？」

「そ、それって！」

「どーなるの！！？」

「「「「若アアアア」」」」

やっぱ、元気だなねえ、奴良組は

刀鍛冶はキレル奴なのか？（後書き）

遅くなってしまい、もし訳ありません

お気に入り数が二百になりました

ぬら孫人気ですね

旅行？しかも二人旅？

・・・話をしよう

アレは今から昨日の事だ、説明しよう

アレは、とがめと姫が六年生になり、七実が中学一年になった時の話だ

夏の日、縁側で横になりタライの中に水を容れて足を涼んだ上にアイスを食べていた時だ

「アチイイイイ、地球温暖化か？」

「情けない声を出さないでください、四季様」

「釵い、無理ゆーなよ・・・物体妖怪のお前とは違い、俺達は暑いんだよ・・・

あ、アイスが無くなった」

「はぁ・・・冷たい緑茶を持っていきますから静かにしてください」

「ファーンズ」

そして釵が去ると同時に千がやって来た

「やぁ」

「よう・・・」

「情けないね、四季のボウヤ・・・」

「うるせーな、暑いんだから仕方ないだろ？
今すぐ上着を脱ぎたい暑さなのに自重してるんだぜ？」

「そうかい、ところで・・・私と旅行に行かないかい？」

「は？まさか二人旅か？」

「ご明察、商店街で当ててね・・・だから誘ったのさ」

「組員と行かないのか？」

「二人旅だつて言ってるじゃないか」

「何故、俺を？」

「そりゃあ・・・礼だよ」

「礼？何の？」

「・・・ほら、拾ってくれた・・・お礼さ」

「拾ったお礼つて・・・かなり昔じゃないか
しかも四百年・・・三百九十年ぐらい前だろ・・・ったく」

「四季のボウヤ、アンタこそ細かく覚えてるじゃないか・・・」

「うつ・・・そりゃ初めての仲間だし」

「・・・やれやれ、アンタは正直者じゃないね」

「否定しよう、俺は正直者だ」

「否定の上に否定しようか」

「二重否定だど!？」

「とにかく、アンタの稼ぎで大体の組が死活問題から抜け出せてるんだよ?」

「あれ?それ初耳なんだけど?初耳なんだけど?俺の打った普通の刀を売ったり、木彫りの仏像売ったりしていた稼ぎって組の資金になつてたの?ねえ?

つか二重否定は無視?無視?」

「とにかく、行くよ」

「・・・やっぱり無視か、そして強制イベントかコノヤロウ・・・」

そして俺と千は旅行に行くことになった
そして今、現在・・・電車に乗っている

しかし何故か、炎と誠、そして賊以外の変体刀使いがサムズアップを千に送り、何処かに行ってしまった
なんなんだろう?戦略?陰謀?なんか怖い・・・

ちなみに炎は月に二回帰って来るように命令してる為に時々帰って

くる

話はズレたが、何処にも行かなかった三人は

炎は京に向かい、引き続き調査

誠は奴良組のカラス天狗と将棋に

賊は艦刀の整備するために家に残った

で、今は・・・電車に乗っているのだが

「・・・なあ、千」

「なんだい」

「さつきから視線を感じるんだが」

「気のせいじゃないかい？」

「・・・お前、気付いてるだろ

汗かいてるし、俺の目を見て言え」

「・・・私、寝るわ」

「・・・はあ」

俺は席から離れ、視線の先に向かう
四季視点アウト

千視点

・・・、行ったね

しかし、まさか・・・本当に二人旅なんだね、四季と

私を拾ってくれて約四百年、一度もお礼を出来なかったのが出来るんだね

・・・これも玉のおかげかね

昨日、提案してくれて良かったよ

さて、読者の皆さんには説明しないとね、え？メタ発言はするな？一回だけだよ、一回だけ

あれは、昨日・・・将棋を指していた頃の話だった

私は優勢、玉は劣勢で初めて将棋に対して黒星を点けそうな感じだった

「ところで、千殿」

「なんだい・・・千、待ったなしだよ」

「いえ、そうではなく・・・四季殿とは何処まで進みましたか？」

「・・・は？」

パチリ、と玉は角を進める

「急になんだい、ボウヤとはただの恩人との関係だよ
別に深い関係じゃないよ」

私は冷静に言い、駒を進める

「なら、千殿は何故・・・四季殿の近い部屋を選ばれたのですか？」

「関係ないだろ、好きとか、どうか」

「私は好きとは言っておりませんが」

「・・・」

「好きなんですネ、四季殿の事」

「だから、どうしたんだい・・・私はボウヤの事を本当に恩人にしか見てないよ」

「・・・正直じゃないですね、四季殿は否定的ですが貴女より正直ですよ」

「しつこいよ、動揺させようとはアンタも堕ちたね」

「なら、そう言うてください・・・四季殿の愛用のキセルを盗った方」

「なっ、なんで知ってんだい！」

「偶然に見かけたんですよ、一週間前に」

「・・・けど千、私が盗った理由は四季のボウヤがタバコを止めないから盗ったんだが」

「・・・けど、始めたのは一週間と一日前ですよ」

「・・・」

「とにかく忠告しておきますが・・・四季殿、いろんな意味で女性達に狙われてますよ」

「・・・刺客かい？」

「いいえ違いますよ」

そして笑顔になった玉はこう言った

「四季殿、意外に人気なんですよ・・・婿養子したい幹部で」

「は？」

「王手、詰みです」

パチン・・・

「え？はい？」

私は再び将棋盤を見たら、いつの間にか逆転されていた

「・・・やられた」

「クス、とにかく忠告しておきます・・・
四季殿の人気は本物です・・・女組員達、全員にアンケートをとり、
聞きましたから」

「成る程ね・・・けど私には関係ない」

ビキビキ・・・

「・・・関係ないと言いつつ、たたみ豊の目を爪で荒らすの止めてくださ
い」

私は爪で豊の目を荒らす止めた

「正直じゃない千殿の為に幹部三人抜いた、残りの幹部達が考えた
策を上げます・・・」

「私は別に」

「なら、お礼代わりに誘ってください・・・はい、チケットです」

と、こつこつ流れで私は四季と行く事になった

千視点アウト

四季視点

「・・・ふむ」

俺の目の前には、ぬらりひょんとリクオ、そして雪女のつらら、奴良組の世話役である毛倡妓が正座していた
いや、俺が『させた』と言った方が正しいのかな？

「でリクオ、なんでデメエはココにいる」

「はい、起きたら電車内に居ました」

「リクオは無罪・・・次、雪女のつらら」

「は、はい！面白そうだと思い、尾行してました！」

「有罪、四十度の熱湯をコップ一杯分、ぶっかける」

「え」

「次、毛倡妓・・・」

「・・・総大将に誘われまして」

「・・・で、アンタ達を連れてきたのは誰？」

「「「総大将です」」」

「う、裏切りおつたな!!」

「ぬらりひょん、いっぺん・・・O H A N A S Iしよつか」

そして俺は、ぬらりひょんに関節技を掛けて、帰りの電車賃を毛倡妓に渡して席に戻った

「つか、寝てるよ・・・千」

俺は席に座ると、やっぱり視線を感じる

「つか、場所を聞いてないな・・・けど良いか」

俺も寝る、俺は視線を感じながら寝た

二時間後、奥日光

「日光？」

「日光だね」

「千」

「なんだい・・・」

「何故、奥日光？」

「・・・アレだろ、誰かの限界」

「おい、何を言ってるんだよ

まあ、日光だし、東照宮を見ていこうか」

「そうだね、名案だ」

「土産も買っていこう」

「賛成」

と、まあ・・・色々な事をしながらホテルに着いたが

「従業員さん、今・・・なんて言った？」

「相部屋でございます」

「「相部屋あああ!?!」」

「四季のボウヤ!どうするんだい!」

「どうするも、何も・・・あの、すみませんが個別の部屋はありますか?」

「残念ながら時期が時期です」

「だってよ」

「・・・仕方ない、相部屋でお願いするよ」

「かしこまりました」

ま、大丈夫だろ・・・

けどよ、やっぱり気になるんだよな・・・視線が

そして部屋に着いた

「四季のボウヤ、何処に行く？」

「あのさ、二人なんだからボウヤは止めろ」

「え、じゃあ・・・四季？」

「何故、疑問？」

「なんか・・・恥ずかしいから」

「恥ずかしいって言える歳じゃないだろ」

そう言い終わった瞬間、灰皿が目の前に飛んできた

「って危な!!」

「避けるな!」

「痛いから避けるわ!!」

「たく、女性に歳を言うのは禁句だよ」

「悪うございやした」

「ちゃんと謝れ!」

「ま、とりあえず・・・これからどうする?
近くに森が有るし、歩くか?」

「そうだねえ・・・やることが、なにもないし・・・歩こうか」

「決まりだな」

森

「ああー、ウマイ空気だ」

「そうだね・・・なあ、四季」

「ん?」

「なんでアンタは、私を助けたんだい?」

「あー、なんでだろ? 雨の中で泣いてる人をほっとけなかったからかな」

「・・・そうかい」

「どうしーん？」

俺は足を止め、森の中を見つめる

「ど、どうしたんだい？」

「何か、来る」

「え？」

すると森の中から小柄な鬼が現れ、その後から化物が現れ、戦っている

「な、なんだ？」

「化猫？いや猫に似た怪奇じゃないかい？」

すると鬼は、俺達に気付いて「逃げろ」と言う

「千、俺達じゃあ、あの怪奇を倒せねえ
おとなしく来た道を戻るぞ」

「って言っても四季、後ろにも何か居るけどね・・・人形みたいな
感じのが」

後ろを見ると、着流しを来た男女が居て笑いながら俺達を見る

「餌だ」

「餌じゃ、餌じゃー！」

「子供達の為に食われる」

「食われる、食われる！」

「こりゃ、大変だな・・・千！
千刀を三本渡す、足りるか？」

「十分・・・」

俺は、集刀から『鍍』を装備し、
『ツルギ』を三本出し、千に渡す

「何分で殺る？」

「三分」

「ラーメン出来るな」

「笑うな、バカ」

「すみませんでしー来るぞ」

四季視点アウト

鬼？視点

たく、ツイてないなあ、一般人に見られるなんて本当にツイてない・

早く終わらせて息子に会いたい！

そして充電したい！！

「だから清められるバケネコ！！」

俺は、腹にある、鼓を猫のバケモノに貼り、清めの音を流す

「音撃打『必殺必中』！！」

俺は腰に有るバチで、鼓を連打し、清めの音を流す

そしてバケモノに止めを入れ、バケモノはバラバラになる

「次は一般人の救助に」

俺は後ろを見て、一般人の救助に向かおうとしたら、死んだ童子と
姫が居た

そして、その横で白い童子の血か姫の血か分からないが、その血が
浸いた刀を振り、血を落とす夫婦の姿が有った

鬼？視点アウト

四季視点

「やれやれ、面倒な事に巻き込まれた物だね・・・」

「ハハハ、千・・・そんなことを言うなよ
そちらの鬼さんは、大丈夫ですか？」

「あ、ああ！大丈夫だ！つか、アンタ等、一体何者なんだ」

「あ？通りすがりの刀鍛冶だが」

「刀鍛冶い？！」

「ところで鬼さん、アンタは・・・誰？」

「・・・あ、しまったあああ！鬼の正体ばれたあああ！刃に嫌われるううう！」

「・・・四季」

「なんだ」

「この鬼、めんどくさい」

「我慢しろ」

「つまり、アンタは先程の怪奇と戦う戦士って訳か」

「そ、俺はエイキ！よろしく！」

「俺は四季と呼んでくれ」

「じゃあ四季さんで」

「俺はエイキさんと言おう」

そしてエイキさんは、仲間の鬼『響鬼』と言う人と合流し、東京に帰った

「さて、色々有ったけど・・・旅館に帰って風呂入ろうか」

「そうだね、私は酒が飲みたいよ」

「旅館の飯にも期待だな」

「どうしてこうなった!」

「私が聞きたいよ!!」

場は浴場、温泉は良かった
肩こり、腰痛、関節痛・・・色々な効果が有る温泉だ

まだ良いが・・・

「なんで混浴しか開いてないの！！しかもダブった！」

「ダブったんじゃないよ！アンタが後から入ったんだろ！」

「仕方ないだろ！清掃中だったんだ！」

つか、こっち向くな！立つな！裸見える！」

「なっ！変！言わせねえよ！！」「うるさいド変態」

「ランクrank アップupした！？」

ちなみに俺達は背の低い岩を壁にし、話しています

「・・・」

「・・・なんだよ、いきなり静かになって」

「・・・」

「おい、千？」

「四季・・・」

「なんだ、のぼ逆上せたのかと勘違いした・・・で、なに？」

「四季は、好きな奴は居るのかい？」

「好きな奴？俺は・・・好きな奴が居た」

「そうかい・・・」

「ああ、戦国の初めの頃だな・・・俺は一人の人間に出会った
その人間はエイキさんみたいな鬼を職とした人でなあ

いやあ、女達が惹かれる程の美しさだった
俺の否定した事を逆に肯定する女だった

当時では、遅い方の十八で結婚した

告白する暇もなく、結婚したんだ、ソイツ
出会って半年で結婚だ、暇がないだろ？」

「・・・」

「けど、四十で死んだ・・・原因は病^{やまい}でだ、元気だったんだけどな」

「・・・なんかゴメン」

「いや別に平気だ、さて上がって飯だ、飯」

バチャン・・・

「・・・」

「あ？水が跳^はねる音？」

俺は、ゆっくりと顔を後ろに向け、岩影から向こうを見ると、逆上
せて沈^{しず}んでる千が居た・・・って

「おい！千！？おい！おいしいい！」

「頭がクラクラする・・・」

「当たり前だ、逆上せるまで普通に入るか？」

今、部屋で料理を食べ終わり、団扇で横になった千を扇ぐ
ちなみに俺達は浴衣姿だ

「・・・アツイ」

「メニューに冷たくて甘いものを頼むか？」

千は横に首を振り、「ビールが良い」と言い始めた

「はいはい、待ってる

確か、有料のビールが冷蔵庫に有ったな」

俺は冷蔵庫からビールを取り、グラスに注ぎ、千に持っていく

「ほれ・・・」

「あ、ああ、ありがとう」

「気にするな、早く寝た方が良くぞ？」

「いや、私は酒を飲む
てな訳で付き合え」

「お前は、はぁ・・・」

俺はグラスをもう一つ出し、ビールを入れ、飲む

「なぁ、四季」

「ん？」

「・・・いや、なんでもない」

「そうか、なんでもないか」

「あぁ、なんでもない」

「・・・」

俺は空を見ると輝かしく、憎たらしく、綺麗な月が俺を見下ろしていた

「千、ありがとな・・・旅行に誘ってくれて」

「・・・なんだい、気持ち悪い」

「酷ッ!?!」

「それにお礼を言うのは・・・」

「あ、なに? 聞こえないぞ?」

「うるさい！さあ飲め！」

「誤魔化したな」

「うるさい！」

さて、後日談

俺達は東京に戻り、装組本家つまり家に帰ってきたが、何故か組の幹部や娘達が息が荒かった

あ、コイツらが電車内で気が付いた視線の犯人か

尾行してたのか・・・

あと、『たちばな』に行くとエイキさんが居て、父親仲間で飲みに行くのが多くなった事を伝えておく

オマケ、斬との出会い

斬視点でいきます

俺は、毎回・・・浅く眠りながら、この家に住んでいる

俺は死んだ、死んで妖怪になって居座り続けてる

この家に陰陽師が来て俺を滅^めしに来るが、俺は斬殺する

斬殺し、家の外に出して、また座り、また斬殺し、また座り

この繰り返しだった

・・・俺を滅しに来るので強い奴は居ないのか？
三流以下ばかりの手練ればかりだ

「ああ、眠たいね・・・」

すると部屋の戸を開け、今日も陰陽師が来たと思った
が、違った・・・着流しを来て、傘を被り、異様な刀を差した男が
部屋に来た

「・・・」

「あ、おはようございます」

「・・・」

なんだコイツ・・・いきなり「おはようございます」って、なんだよ

返せと？「おはようございます」と返せと？

騙して、不意を突いて殺すという策か？

「テメエは何者だ？」

「刀鍛冶」

「へえ、刀鍛冶か・・・その刀鍛冶が何の用だよ」

「いや、噂の妖怪に会いたくてな」

「噂の妖怪？俺の事が？」

「ああ、一瞬で切断する妖怪が居ると聞いてな、見てみたいと思っ
て」

「なら、さっさと帰れ・・・」

「いやいや、お前さんを雇いたいんだよ？
どう？血で錆びた刀を新しくしてやるよ」

「いらん、帰れ」

「・・・じゃ忠告だけしておくよ
その刀、折れるよ」

「そんな脅しは聞かん」

ガラ

「夜に来るとは思わなかったぞ、陰陽師」

「ああ、貴様を殺しに来た陰陽師だ
滅しに来た、死ね！」

「零閃！」

俺は飛ばされた式神を斬り倒し、再び斬ろうとすると鞘の中で折れてるのに気が付いた

（まさか、さっきの男が言った通りになるとは！）

「死ねえ！妖怪！」

俺の目の前に札が迫った瞬間

「デメエがな・・・」

目の前に有った手が切り落とされ、陰陽師の血が俺の顔にかかった
そして陰陽師の頭に刀が刺さり、ドロドロと骨も残さず溶けた

「・・・だから、あの刀について忠告しただろ？

新しい刀が欲しいなら来い

あと俺の背中を護れ、新しい名もやるよ」

俺は何故か名も知らない刀鍛冶について行った

現代

「ふあああ、眠い・・・」

「しかし珍しいな、お前が朝早く起きるなんてな」

「うるせ、懐かしい過去を見ていたんだよ」

「そっか」

「ああ・・・」

だが今の生活は、悪くないな・・・

あの家に一人で居るよりも、な・・・

旅行？しかも二人旅？（後書き）

投稿が遅くなってすみません

とがめ、姫の友人が来る

「あ、明日の夕方に友達が来るから」

「は？」

時は流れ、姫ととがめは中学一年
七実は中学二年になった、とある日

夕飯を食べてる時にとがめは、こう発言した

「とがめ、どういう意味だ・・・訳を聞きたい」

「うむ、そうだな

まず今日の話からだ・・・最近、部活を掛け持ちしてるのは父上も知っておるだろ？」

「ああ、確か将棋部と・・・」

「清継探偵団よ、私も入ってるわ」

「あれ、七実ちゃんは？」

「千、私は二年だから清継探偵団って物は入ってないわ、だってくだらないから」

「七実、お前・・・くだらないの言葉で一蹴するなで、土曜日来るのか？」

「そうだが」

「でも・・・なんで急に？」

「知らん、清継君に聞け」

「ま、原因は、お父様だけどね」

「俺？」

「表では、かなり有名になってるわよ
細工に加工、なんでも出来る職人って」

「ああ、そういえば取材に来ていたな・・・
なんだっけ、『OREジャーナル』だったかな？」

「多分、それが原因」

「あれ？俺は名を伏せてくれと頼んだ筈なんだが・・・
誰だっけ、取材した奴は・・・」

確か『城戸』なんとかって奴なんだが
真司だっけシンジだっけ？

「ちょっと待て、つまりアレか？屋敷に来て遊んで終わりって流れ
か？」

「いや遊びの方がマシだ、家に来る理由が妖怪探らしいんだ」

「妖怪探し？ああ、確かにこの住刀は古い日本の屋敷になっている

からな

妖怪が住み憑いてる可能性があると睨んだのか・・・
なら脅かして帰らせれば」

「それは無理よ（だ）お父様（父上）」

「おおう、珍しいな二人が声を合わせるなんて」

「理由は簡単、陰陽師が居るからよ
下手に脅せば消されるわ」

「うげ、マジか？で名前は？」

「花開院 ゆら」

何これ、詰んだ？

俺は千と賊、斬と薄の顔を見ると顔文字のオワタのような笑顔にな
っていた

「とりあえず、来ても良いぞ・・・」

「了解、明日の午後に来るぞ（から）」

「はいはい」

次の日、俺は正門前を掃除していると

「あのー、すみません・・・四季崎とがめさんの家は、ここでしょうか？」

「あ？」

俺は、顔を上げて見てみると、スタイル良い娘と元気が詰まってるような娘が居た

「そうだよ、そして俺が四季崎とがめの父だが」

「嘘、なんか若！？しかもカッコいい！？」

「巻！スミマセン」

「ハハハ、大丈夫だよ、今の娘はそれぐらい元気じゃないと

とりあえず立ち話は止めて、家に上がりなさい

関東一の和菓子屋、『たちばな』の団子を用意しよう」

「「はい！！ありがとうございますー」「」

俺は門を開けて、二人を客間に案内をする

「あ、そういえば・・・名前は？」

「あ、私は巻 紗織です」

スタイル良い娘はそう言い

「鳥居 夏実です！」
元気な娘はそう言った

「俺は四季崎 竜太郎、この屋敷の皆から四季と呼ばれてる、だから四季で良いよ」

「わかりましたー」

俺は客間に案内をし終わると正門から声がし、真庭 人鳥がトテトと正門に向かって行った

ちなみに真庭 人鳥と蝙蝠は京の一件から身を引かせ、装組に待機命令を出したので、ここにいる

「なに、今の小動物！」

「かわいい・・・」

「言っておくが人だぞ、人」

そして人鳥が再び戻ってきた時、大人数が居間にやって来た

ゆらも居たよ、今は気付いてないな

ただ人鳥は、リクオの幼なじみである家長カナちゃんに抱えられていた

「おや、人鳥・・・見事に決まってるな」

「四季さん！」

「さて皆さん、今からお茶菓子と二人を呼んでくるよ
カナちゃん、人鳥返して」

「えー、嫌です」

「いや、返して・・・」

俺は人鳥を取り返し、とがめと姫を呼びに行った

四季視点アウト

姫視点

私とは今、戸棚に有った団子を食べている

「おーい、とがめ、姫、友達来てるぞ」

「「!」?」

「・・・って、その『たちばな』団子食うな!?!それ客人用!?!」

「嘘!?!」

私は苦笑いし、とがめは驚愕の顔をしている
お父様は、拳を振り上げて頭に――

ガアツウン！

「ぎゃふん！！」

―入った・・・

「ねえ、姫ちゃん、とがめちゃん・・・頭のたんこぶがスゴいよ？」

「気にしないでカナちゃん・・・」

「うむ、気にするな・・・」

「そんな事より探険させてくれ！！」

と、リーダーの清継が立ち上がり言った

「でも失礼だよ

いくら四季さんが、僕の知り合いでも許してくれるか分からないよ？」

とリクオ君が言う

私は扇子を出して笑顔で言う

「別に平気よー、家のお父様は仕事を邪魔しなければ、して良いって」

「・・・OTL」

あ、リアル君がリアルにOTLの姿になった

「清継探偵団！いくぞ！」

「おー」

花開院さん、お札出しながら手を上げないで

「まず、父上の仕事場は三つ有る
鍛冶場、彫物・・・そして細工部屋だ
それを覚えてほしい

入った瞬間、拳が飛ぶ、覚えておけ
戸を開けたとしても拳は飛ばん、良いな」

そして全員頷いて、まず斬が居る部屋の前に来た

「ここは誰の部屋かな？」

「ああ、斬の部屋だ」

「斬さんって誰？」

上から清継、とがめ、カナちゃんの会話

「斬は居合い斬りの達人なの、普段は書道の先生をしているの」

「へー、フルネームは？」

「「へ？」」

「だって斬って、なんかアダ名みたいなんだもんだから、本名は何かあったって」

「うむ、それが私達も聞いたことが無いんだ
だってアイツは、こう言うんだ「俺は斬って名が気に入ってるんだ、
本名なんて物は棄てたよ」ってな」

「なに人の部屋の前で話してたよ、とがめの嬢ちゃん」

すると部屋から斬が現れて私ととがめ以外の人は挨拶する

「ん？奴良リクオか、最近の調子はどうだ？」

「あ、調子良いです」

「そうか、あ・・・もし理由が無ければ部屋の前で話をしないでくれ
集中力を全て使いきったから寝る」

「ごめんね」

「分かってくれたら別に良いんだよ、姫嬢ちゃん
じゃ、夕方まで寝るから」

斬はパンツと戸を閉めた

「よし！次、行こう！」

「そうッスね、清継君の言う通り、次に行きましょう」

と清継君と島君は言う

「そうね、行きましょう」

姫視点アウト

四季視点

さて、俺は『たちばな』に来ています
理由は団子を買いに来た

しかも最後の一個だった
しかも相手が

「なあ、セイカイさん、最後の一個は俺にくれよ」

「いいや、譲れないな!」

「譲れ!娘達の友人の為に譲れ!」

「いいや、譲れないな!いい加減にしないと被うぞ!」

「やってみろ、退魔忍者『隠流』のセイカイ!」

すると俺とセイカイさんの間に常連客の橘さんが割り込んで来た

「あ、おやつさん、コレタベテイイカナ？」

「相変わらず滑舌かつぜつが悪いねえ・・・朔也君、良いよ二人がケンカしてるし、君に譲るよ」

「「!?!ちよつ、立花のおやつさん!?!」」

「ありがとう、おやつさん!」（OMO）

「「オンドウルラギッタンディスカ!ダディーナザン!」」（!OWO）

すると奥から警棒を持った男性、小暮さんが出てきた

「五月蠅い!?!」

「「ヤバ!?!」」

俺とセイカイさんは走って逃げた瞬間、ゴンと警棒で撲られた

四季視点アウト

とがめ視点

今、私達は道場に来ていた

理由は掛け声が聞こえて、みんな興味を持ち、道場に来たのだ

で、来たのだが

「虚刀流、飛花落葉！」

「！」

今、七花が王と組み手をしている

今の状態は、王の両肩を押されたが、勢いを使って倒立し、両足で蹴りかかるが

「うお！」

髪の毛を数本持っていかれたが避けたが、王は腕を曲げて、ばく転しながら下がる

「七花殿、今の攻撃は中々（なかなか）良い物です」

「ありがとよ、王さん・・・けど何で無手でそんなに強いんだ？
あんたは、そもそも護身術の剣なのに・・・」

七花は、ズドーンと言う効果音が上から降ってくる感覚が不思議に有った

「七花殿、剣の護身術だけでも得物が無ければダメです
だから我流の拳法を取り組んだのです」

「虚刀流が、虚刀流が・・・ブツブツ」

「と、言っても聞いてないですね」

七花の奴、いじけたな・・・

全く後で慰めてやるか

「七花君は強いのに、それ以上に強い人が居るんだ」

「ま、家の拳法のランクでは王は下位の方だけだな」

するとガチャリと後ろから音がして後ろを向くと、『鎧』の手甲とサングラスを着けた、漁師姿の賊がマグロを担いで出てきた

「あ、賊さん」

「よう、リクオ！あ、今から買ったばかりのマグロを解体するんだが帰り際に持ってけ」

「あ、ありがとうございます」

「あら、皆さん・・・お揃いで我が道場に何かご用で？」

「いや、見学だ・・・七花を慰めてくる」

「そうしてください、とがめさん・・・」

「と、いう訳だ・・・」

「分かったわ、さあみんな、行くわよ」

さて、慰めますか

とがめ視点アウト

リクオ視点

今は中庭に居るんだけど・・・

なんで装組の皆は当たり前のように家の中をうろついて居るの!!

つて、釵!? 君は、なんで中庭を掃除してるの!?

「ん、なんだアレ?」

「なんでしょ?」

ああああ!!? 花開院さんと清継君が釵に気が付いた!!

「人形殺法、旋風」

つて気付かないで庭の手入れしてるし!

「ああ、アレはお父様の作品よ

お手伝いカラクリ人形『釵』ちゃん」

「カラクリ!? スゴいな、まるで付喪神みたいだ」

「ホンマや、まるで妖怪みたいや」

え、納得しちゃうの!?

つか姫ちゃん! それじゃ、すぐにバレるよ!

「あ、姫様とリクオ様、ようこそ・・・

そして、友人の皆様方様^{がた}

ようこそ、いらっしやいました・・・私は、釵です」

「「あ、どうも」「

挨拶しちゃったあああ!？」

「では、仕事があるので」

あ、去っていった・・・

「よかったあ」

その後、妖怪はバレず全員帰ったんだけど

「あ、四季崎さん家に忘れ物してしもうた・・・みんなさん、先に帰ってください」

花開院さんは、途中の道で引き返した

たぶん大丈夫だと思った、だって気付いてなかったから

リクオ視点アウト

四季視点

「はい、これからは気をつけな」

「ありがとう、おじさん」

俺は今、公園に居た小さな子供が離れた風船を取ってあげて、渡した時間も夕暮れ、公園には人も居なくなり、俺はエイキさんを誘って一杯呑んで帰ろうと思った瞬間

「お前が来るんだよなあ・・・ゆら」

俺は後ろを向くと、式紙の符を持ったゆらが居た

「刀鍛冶の四季、アンタを滅する」

「ほう、アホみたいに抜けていた、お前が「滅する」って言うとは、成長したねえ」

「ぬかせ、ド阿呆・・・」

すると、ゆらは、カバンから『閻魔』を取り出した

「ウチは、アンタが打った刀に選ばれた」

「へえー、おめでとう」

「・・・お爺ちゃんは、全国の陰陽師にアンタを封印も滅するのも禁じた」

「あ？話が飛んだぞ？」

「・・・滅するのや封印するのには、アンタが打った刀に選ばれた物だけがして良いって権利がある」

「つまり、ゆら・・・俺を殺しに来たって訳か」

「・・・せや」

「ハア・・・来いよ、相手してやる

式紙を出しな、俺は刀を抜かないでやらア」

「なら・・・行くで！」

「だが」

俺は玉刀『爆』の煙玉を懷から出し、地面に叩きつけた

そして一面に煙が舞い上がり、俺を包んだ

「煙幕！？卑怯やで！」

「刀は抜いてないだろ、じゃな！」

そして俺は、急いで逃げた

「逃がしは、せん！出でよ！廉貞！」

んな、煙！吹き飛ばしたる！

式紙改造！！人式一体！」

「ちよつ、おま！それは、なに！？」

なんか金魚の式紙が右腕にくっついて大砲になったよ！？
あれ、ちよつ、待つ！積んだアあ！？

「花開院流！陰陽術！

よみおくり
『黄泉送葬水包銃（ゆらMAX）』！」

「ちよつ！玉刀『爆』限定奥義！『星見花火』！」

五尺玉級の『爆』を出して投げた瞬間、金魚の口から砲弾が出てきて『爆』の限定奥義と相殺するが、なんとかMAXの方がほんの少しだけ威力がでかく俺はぶっ飛んだ

四季視点アウト

ゆら視点

なんやねん、アイツ…

花火出して逃げよった、けど少しだけ手応えは有った

「けど逃げおった・・・

次こそは、次こそは絶対滅する！」

私は、そう発言をして、心に刻むのだった

四季視点

「どうして、こうなった？」

俺はぶっ飛んで、川に落ちて上がってきたのは、いい・・・

そう、そこまでは

俺の前では、この前のニュースで刑務所を脱獄した浅倉 威がヤモリの焼いたを食し、隣には皮ジャンを着た男二人が味噌と塩のカツプ麺を食べているという地獄絵図だ

「おい、ヤモリを食うか？美味いぞ・・・」

「は、はあ」

「塩も食え」

「いや、味噌もだ」

「ど、どうも」

・・・誰か助けて

ちなみに、このあとは普通に帰り、たまには美味しい物を持って来いと言われました

・・・結構、いい人でした

「しかし、どうするかだ・・・

とりあえず、娘達には真庭の奴等を護衛につけておこう」

はあ、疲れたなあ・・・

ゆらには、気をつけておくように言っておくか・・・

とがめ、姫の友人が来る（後書き）

あとがきです

さて、いろんな意味でスミマセンでしたあああ！

投稿が遅れた理由は、ただ一つ！

お気に入り数が半端なく緊張して投稿出来ませんでした

さて、特撮キャラかなり出ましたが

誰かが分かりましたか？

スーパー戦隊から一人

仮面ライダーから六人出ました

分かりましたか？

最後に玉刀『爆』のアイデアをくれた『mist』さん、ありがとう
ございます

次回も閲覧、お願いします

（！OMO）> 次回も見てくれ！見てくれなければオレノカラダハ、
ポトポトダアアア！

とがめが・・・拐われた

とがめと姫の友達が訪れた、次の日

ぬらりひよんの家からの帰り道に、とがめが拐われた
しかも、カナちゃんとゆらも一緒に・・・

そして拐った奴等の使いが、やって来た
そして今、真庭達の報告を待っている

「四季殿、絶だ」

「入れ」

四季視点アウト

絶視点

我は、許可を得て、四季殿の部屋に入る

「で、調査の結果は？」

「うむ、奴等は旧鼠組だ「ソイツは分かってる・・・他の情報だ」・
・・・元奴良組だ、そう」

パチン・・・

続きを言っていた途中、刀をしまう音が聞こえた

「・・・ソイツは本当か？」

「ん、ああ・・・」

「・・・奴良組に行く、薄と斬、賊を護衛をつける、呼んでこい」

そう行つた四季殿は、障子を開けて力強く閉めると、我の後ろに有つた戸が真つ二つになっていた

「いつの間に・・・？」

そつ心から出た、言葉だつた・・・

絶視点アウト

四季視点

俺は今・・・奴良組の本家に居る

「おい、刀鍛冶の四季だ・・・」「何するんだ、じーちゃん!」入るぞ・・・」

俺は賊、斬、薄と一緒に入つた

「四季・・・なんで、この場に」

「ぬらりひょん、娘が拐われた・・・」

「・・・そうか、で用件は」

「『落とし前は、どうつけるんだ?』という感じだ・・・」

「すまぬが、後で良いかの・・・」

ぬらりひょんは、リクオを見ると叱り始めた

「陰陽師」とか何やらと

リクオは、こう答えた「妖怪が悪いんだ」と・・・

ゴス・・・

気付いたら俺は、リクオの腹を殴っていた

「四季!?!」

「うつさい、賊は黙れ」

「カハツ・・・」

リクオは、腹を抑え、横たわっている

「ぬらりひょん、落とし前はこれで良い・・・」

「・・・お前も少し加減を」

「知るか」

「四季さん、なんで・・・」

すると腹を抑えつつ、俺の顔を見るリクオ

「リクオ、妖怪だつてなあ・・・良い奴は居る
悪いのは、ほんの一部だ・・・分かるか？」

「でも、カナちゃんや花開院さん、とがめちゃんが！」

「だったら！テメエも悪だ・・・」

俺も、青田坊も、黒田坊も、首なしも、妖怪が悪いんだつたら全部
悪いじゃねえか・・・」

「な、なんで僕m「妖怪の血だ・・・」・・・」

「妖怪はなあ、元は人間だった奴も居る
ソイツ等も悪いのか？」

「・・・」

「分かったなら、少し黙ってる」

俺は見知らぬ猫の妖怪を見た

「で、コイツは？」

「も、申し遅れました・・・化猫組、当主の良太猫でございます
実は本当に一番街を預かってるのは、ワシらなんです・・・リクオ
様」

「え？」

「鼠にあつという間に制圧された・・・て訳か」

「四季の旦那、鋭いですね」

「ど、どういうこと？」

「・・・リクオ、奴等は良太猫が率いる化猫達が居た町に来たつまり、化猫の天敵で有る旧鼠組が入ってきて乗っ取ったという流れだ・・・確認するが、そうたる？」

「へい、そうなんです・・・四季の旦那

ワシ等、ぬらりひょん様が浮世絵町に居をかまえる前から、あの町で博徒として悪行をつんでいた古い妖怪です」

「・・・旧鼠な

たしかに・・・うちの組にも、そんな奴等は居た気がする・・・今は、一番街で・・・」

とぬらりひょんが、呟くように言った

「で、どうするんだ？俺達は、変体刀が四本有れば、充分だ」

「・・・好きにしてよ」

俺はリクオに背中を向き、「好きにさせてもらっ」と言ったのち、俺は言う

「お前の父親は、1つだけ考えず行動したぞ」と・・・

「ボクは、人間だ・・・だから力がない」

リクオは、中庭に出てふらつきながら、しだれ桜に行く

・・・奴良組も三代で終わりが

俺達は玄関に向かつて、靴に履き、外に行くと横から誰かに顔面を殴られた

「つてな！！誰だよ！！」

「オレさ、リクオだ・・・」

「は・・・？」

俺を殴ったのは、妖怪として覚醒したリクオだったけど・・・なんで背が高くなるんだ？

とがめ視点

ふむ、私は確か・・・カナちゃんと花開院さんと一緒に居て・・・

そうか、私は誘拐されたんだ・・・鼠の妖怪の旧鼠に

「起きたか、四季の娘・・・」

私は、後ろを向くと偉そうに座る男が居た

「お前が一番最初に起きたぞ」

「・・・」

私は左右見ると、カナちゃんと花開院さんが横になっていた

「たしか、貴様は・・・星矢^{せいや}だったな」

「ほう、一瞬の会話で名を知るなんてな」

「貴様の本当の名もな、だが言わない」

さて、私は父上に奇策を考える為に鍛えられた・・・
待てよ、父上は私に変体刀の一本を預かった・・・たしか、死期^{しきと}刀
『黄泉』・・・

効果は知らん、大きさは果物ナイフぐらい・・・

「なあ、星矢・・・貴様は何故、このような事をした」

「んなの決まってるだろ、お前の父親・・・四季の打った最高傑作
の妖刀十二本を貰うため
そして奴良リクオの三代目剥奪だ」

なるほど、それが企みか・・・

「さて、お前の父親は来るかな、刀を持って」

ニヤリと星矢は私を見た

「くっ、クハハハ・・・」

「な、何が可笑しい！」

「ハッハハ・・・ナメるなよ、父上を・・・装組と奴良組を」

私が言い終わると入口は切り刻まれ、後ろに百鬼夜行を背負った男が二人居た

「遅かったな、父上」

「わりいな、遅刻の埋め合わせは『たちばな』の団子で」

「うむ、頼むぞ」

「テメエ！なに呑氣のんきに会話してるんだ！」

私は父上と会話をしていたら星矢はキレた

とがめ視点アウト

四季視点

さて、戦う前にネズミが吠えてきた

「テメエが四季か！奴良組の三代目は、何処だ！」

ん、リクオが分からないのか？

まあ、ムリもないな・・・

「・・・いかにも四季だ

が、刀は渡さん・・・キサマ等に渡す刀など一本も無い」

「なっ！」

すると、回状とか何とかと次に言ってるが、リクオが「破いた」と宣言しネズミ達は騒ぐ

「バカか！お前らに人質が居るん」「一つ聞きたいが、お前の後ろの牢に誰もいないぞ」・・・は？」

ネズミのボスつばい奴は俺に指摘された後、後ろを見る

そこには青田坊が牢を引き破り、首なしがカナちゃん、ゆら、とがめを護りながら逃げてる姿が有った

「なっ・・・なあ！？」

「どうする？人質が逃げたぜ」

リクオ、挑発するなよ・・・

なーんか、覚醒リクオって気が強いなあ・・・おじさん、ちょっぴり複雑

「チツ、なめやがって・・・
テメエら全員！皆殺しだ！」

「皆殺し？その台詞返すぜ！！」

「行くぞ！！」

そして組がぶつかり合い、乱闘になった

四季視点アウト

薄視点

さて、久しぶりの戦いくさでござるな、腕うでが鳴る

「弱そうな奴から食ってる！」

「ヒャッハー！」

「死ねえ！！」

やれやれ、命知らずが三体でござるか
拙者は、刀を・・・薄刀『針』を抜刀し、天に向ける

「な、なんだ？その刀は？」

「綺麗で、透き通ってやがる」

「関係ねえ！殺っちまえ」

三体は、拙者に飛び込んで来て、頭部がネズミになる

「拙者に・・・ときめいてもらってござる・・・」

拙者は眩き、三体を一瞬で斬り、宙に舞いらせた

「・・・か、カッコいい」

そして三体は落下しながら、そう呟いた

薄視点アウト

斬視点

「おいおい、弱すぎるな・・・」

俺は今、切断したネズミ達を中心に居る

「な、なんで鞘さやに血が溜まってるのに、なんで血がかなり漬いてる刀が切れ味が落ちないんだよー!!」

「あ？ああ、コイツは・・・この『鈍』は斬れば斬るほど切れ味が上がり、抜刀速度が上がるって品物よ」

「まあ・・・」と俺は言い、『鈍』で一閃を振るい

さっきまで質問してきたネズミを斬る

「死ぬんだから関係無いよなあ・・・？」

斬視点アウト

賊視点

「オラオラ！死にたい奴は、どいつだあああ！」

「ヒイイ！」

「あの鎧男はなんなんだよ！」

俺は今、虫の居所いどころが悪い

理由は簡単だ、死んだ・・・いや殺された妹に似た少女が拐われたからだ

「オラオラ！」

俺は一匹のネズミの頭を持ち、握り潰す

そして足で蹴り潰し、肩で相手をミンチにする

「ヒイイイ！！！」

「逃げるな雑魚がああああ！」

賊視点アウト

四季視点

「・・・グロテスクだな」

あー、良かった・・・とがめに『黄泉』を持たせといて

『黄泉』は元々、相手の死期を見る刀だ…

主眼は死期を見る

そして、これは発信器になる

使い方によってやり方が変わると・・・死の六秒前になると死神が現れるのだ

「しかし、雑魚ばかりだな・・・」

そうそう今、俺がしている事は雑魚奴等を拷問に掛けている

「さあ、死ぬのは許さんぞ？貴様等は何度でも死の淵^{ふち}まで追い込み、蘇らせ、また追い込み・・・

この繰り返しだ・・・精神が死んだら変体刀の実験体にもするから安心しろ」

「殺してくれ!!」

「いつそ、逝かせてくれ!!」

「恨んでやる!!」

「鳴け!叫べ!絶望しろ!俺に・・・いや俺達に喧嘩^{けんか}を売ったこと

を後悔しろ！！」

俺は鞭^{むち}や縄で縛り、集刀に入れる

さて、リクオは……ってボスネズミを燃やしてるよ

「ん？どうした黒田坊？」

俺は一人の妖怪……奴良組の突撃隊長、黒田坊の視線に気が付いたが、黒田坊は顔を青ざめていた

「おい、黒田坊？」

「私は、四季様が仲間で良かったと思います」

「そう？ありがとうで良いのかな？」

「私に言われても……」

「けど一つ聞いて良いか黒田坊……」

俺が近づくと身を退くのは、止めてくれない？」

「申し訳ないが暫^{ひまじ}くは無理です」

泣きたい……

まあ、色々有ったが……全員は現地解散
リクオが燃やしたボスネズミは消し炭になった

そして今は

「背中にゆらを背負ってる状態です」

つか誰に話しかけたんだ、俺は

「・・・ん？」

「ん、起きたか」

「フアアア・・・え？」

ゆらは、アクビをして俺の顔を見て自分の状況を確認する

「な、なんでウチは、四季に背負われとるの!？」

「・・・さあ？」

「つか、降ろせ!降ろさんかい!」

「よく言つよ、気絶していたくせに」

「五月蠅い!滅したる!そこに正座しいや!」

「だが、断る」

「なん・・・やて・・・!」

「まあ、とりあえず・・・とがめを守ってくれて、ありがとう」

「ウチは、アンタの為にとがめさんを守った訳やない

とがめさんが死ぬと悲しむ人達が沢山^{たくさん}居る

だから助けたんや」

「・・・やっぱり人間は面白いねえ」

「てか降ろせ！」

「どうでもいいけど、お前の家は何処^{どこ}？」

「無視か？わざと無視しとるんかいな？」

とりあえず、ゆらを家まで送り届けて俺は帰った

ただ・・・

「今回は見逃してやる！それが恩返しや！」

と、顔が赤くなりながら家の中に入っていったゆらが、ちょっと気になった

風邪引いたのかな？

とがめが・・・拐われた（後書き）

投稿遅れたあああ！

四季「拷問決定だな」

ちよつと待って！いくら後書きでも痛いよ！？

四季「五月蠅い死ね！」

ギィヤアアア！？

＼ピチューン／

四季「とりあえず次回予告だ、メインは秘密！番外編！とある真庭達の苦労話だ！」

「蝶のように舞い！」

「蜂のように刺し！」

「蠅螂のように食らう！」

「我等、いざ参る！」

この三人好きなんですよ！作者は！

アニメの中では真庭の目立ち度は、やや上位ですよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6692s/>

妖と人

2011年9月9日16時27分発行